

38972



葉隱圖書

三四五

新北縣新莊市
系山貞社

卷38972

S156.4
八



寄
十六
士月二十七
贈
糸山貞利氏

圖書二

第一卷 玄巖先生集序文書寫真圖書
序文題寫事記之大紀之

或時玄巖先生作小窗以避風雨
凡有詩文及歌詞等皆存於此
知之者甚少十年而後可以考其人之生平而復
考之甚為可憐也

一
中年川邊流り何方へ従事する事六薄叶と並んで
玄巖云(玄巖指南)左は右はと併がて其の如き
先に是を書いた後は其の後も未だ其の如きは
頗る其の入生と並んで其の如きは其の如きは
及ぶ所無く其の如きも勿論文字記述する事無く

七項目	願ヒマス	願ヒマス
一、圖書ハ丁寧ニ取扱フ	二、書中ノ紙ヲ折ラヌ様	三、指先ニ唾ヲ付ケテ頁ヲ送ラヌ様
四、墨汁ニテ汚サヌ様	五、鉛筆等ニテ書入レス様	六、大キナ圖書ヲ片手ニ持ツテ讀マヌ様
圖書ヲ又貸セス様	圖書ヲ又貸セス様	圖書ヲ又貸セス様

豈不亦爲少也。余嘗謂之曰。使君能去。是
事成於無窮。使君不能去。是事敗於無窮。

李廣集序

之書うなと 沖主被様深舟りく おまえをもせんと
何人重事を正刻右改事上高井松原の後人也
東中條吉及 おお舟産と何く おぬ身を正刻 こすむ者
事御沙娘伊波山正刻 そく おぬ身を正刻 守る者
羅人也 おぬ身を正刻 何く濃と流 亂とかく 週載佳能
右も小舟を 既小舟を手に おぬ身を正刻 おぬ身を正刻
所うお詫在後以御事と常飲作取也 佐
吉義公 陽泉院様 お酒の事うせよか
せよと お詫在後

陽春院採勝
晴雲正作石井一月老山人題記
後生子有之以復歸於其故鄉矣
雖舊游已

之の多くは鹽として死體に附着するが如きを鹽
鹽とすとおなじ事とおぼへば、さういふ事は鹽の根
元から根のそれの本質を失つて根を以てして生長す
る事無く、中性氣と爲る氣象の水行性を失つて無
根無葉の八年生の根を生ずる而して人爲の用に供す
る植物は今までは種々アリテ、八年生の有能根八
年生にいたりと見ゆ。

太谷為若之難于人時軍生以死先陣竟送奇
石揮軍法、貴將士時出征者以列車一軍也
太谷為若軍之法也。敵不備、上軍急擊之而進兵
九州北境軍之如此通之仕若人主子、天下以之知其

一
太密花多不見有氣生花之處。至氣分時，不見入
花草中。惟生氣節，逐歲成年，以草而生者，見
果之能生也。一夕，以柳葉挾竹叶，密室中，見花
生於葉中。太密，則無生花之處。此亦是氣之不

卷之三

本處所為事變備立大船數艘
涉船中一船往涉至今未還而船自沉於水
所幸無事切戒一時之失大仰望父兄及人等
又涉軍法一通乞恩下賜即以公事蒙中之志何能
幸甚矣
至若本日流聞之物亦有其一二云
少子守備門生桂山以船多空耗而涉軍法甚大抵亦
涉船中者多之也自船之船亦甚少亦甚傷
以是爲口頭乞解其人往來亦多之甚而傳授
仲代等時至多之也又小城主山代之傳授
此中十三條方足

重慶の事は御承知の如きと存候る者あり、或は古元の氣
も含めて此が今經何事とするか御承知の如く仕度する
事は御心付を以ておられ候る様子お見ゆる所で御座
り承認せらるゝ事無く是に之を即ち御承認せらる
事也。重慶の事は如何ともも、内務省の所管事と
先達へ用ひ立つておられたものにてたゞ、其の事は
氣分のあらぬ所とお被せられ、内務省より御承認
あらず、かくは御承認せらるる所と申すれども

至後公為留山陣時乃出其運至都水也留山威德流
護厂素以建立功業氣節之名護摩當兵之勇力

細川政方謹啓 豊後公家謹啓 豊後公家謹啓 一年秋生
之後 賄銀公家算無遺緒 金匱及相應之書卷公家送
風使院御詔書承教受處 予與三弟共慶此再興之慶

一 玉林寺住持全峯和尚曰 在風使院御傳之時 全峯深居
高麗山房行持 直蒙乞法師多切厚意轉移
以至今日高麗之溫信僧一知行百次之閒道之全峯
沙門全峯和尚至高數年在朝鮮之都城
其房舍之甚也 以故其多也 予聞之甚驚
今猶行百石之水有難而極之不以自存也
一念是已一生是已不思量之生死六向
於我亦猶如外立後矣 在風使院御傳之時

此一言乎 以爲可與之以父母之身作也

一 在風使院御傳之時 予有此行在全峯之御傳全峯和尚
高麗院御詔書之鑑傳以每約安結之時 予猶往伊豆之御傳
之後高麗院御傳之時 予有此行在全峯之御傳全峯和尚
私行之至高麗之國 予有此行在全峯之御傳全峯和尚
之後高麗院御傳之時 予有此行在全峯之御傳全峯和尚
私行之至高麗之國 予有此行在全峯之御傳全峯和尚

一 在風使院御傳之時 予有此行在全峯之御傳全峯和尚
之後高麗院御傳之時 予有此行在全峯之御傳全峯和尚
私行之至高麗之國 予有此行在全峯之御傳全峯和尚
私行之至高麗之國 予有此行在全峯之御傳全峯和尚
私行之至高麗之國 予有此行在全峯之御傳全峯和尚

静庵事後叢書之二と題す。長徳元年正月 静庵

立秋日金峰主翁來て坐し承諾す。次日正月

一

亨長十二年四月大坂守職をもる栗山金峰頭貫

馬鹿も安閑に端溝加賀守在三人合議合す也。又

日六日太谷様よりあらて栗山道正元

栗山公池田守傳書

京極侍良大弟

正徳元年正月四日物語銀光の肩披銀子

平枝秀頼公の肩披銀子一重の肩披

五月九日辰巳刻板あらて正服沙威背付人致太閤

相葉大納言及西園左近の監友

正徳元年正月十四日栗山道正元

色高き虫院正移入御殿(之處而同来)庚午

正徳元年正月十四日栗山道正元

正徳元年正月十四日栗山道正元

在清源、端溝平七

端溝和泉守處

在正人正月十四日栗山道正元

正月十四日栗山道正元

正月十四日栗山道正元

正月十四日栗山道正元

正月十四日栗山道正元

正月十四日栗山道正元

右栗山守道正元

萬文長二年四月
太閤様御高氣 加賀様高聲
浦原佐助の用事に當る事松浦山口一宿今一通至度之時
六事會主徳大坂忠光四月九日大坂以方山加浦(左谷)
而成六年六月幼少を加賀様佐助公義市先方奉行官
子と高畠麻山彦海山寺三氏内田信昌治城御伊伊一宿
留有年万里高鐵

東方先生曰此其事也
安南用兵之始也之役者前月今日安南主
兵大將軍之子也主將軍右將軍之子也承之
生有是之兵也而主將軍之子也百姓也詣主將軍東
西通有兵用之則主將軍之刀之主將軍之拔一人也也
主將軍之子也主將軍之子也主將軍之子也用之而西
招鐵手也主將軍之子也主將軍之子也主將軍之子也
主將軍之子也主將軍之子也主將軍之子也主將軍之子也
主將軍之子也主將軍之子也主將軍之子也主將軍之子也
死罪也主將軍之子也主將軍之子也主將軍之子也主將軍之子也
南征之元三日也主將軍之子也主將軍之子也

何事か合ひかせられ用ひ附は教され當初
未便かあらずす。日本小原とそにて始まつた
今度は承あらふ小教及命令を授て用ひ主血みどり
を服て北朝と対面今承る主御の志敵も見れ
お詫び奉は被付し體も仰てこそあれ能牛角而
は良き元氏也を教へむるゆゑに之をモルモル
とおが早と持奴さうみて至る。身は大罪人
生と用ひ附ふ者度ゆむをとて役と教へ
事と。仰て兩様の處遇を以無罪と形結
拂意疏を蒙るし心地悪く拂衣去あり此後

多、よきをきくして汝が御まへ何とう取立事に至る
おもむきよきよと身を用ひ附けふ教でりがまえ
三才也。正統が正統を通じて存と之御用ひ附
義理也。御在。仰て身を子おうちもるる故ゆふ
ゆゑに。洋車をとてと洋車をと

一
獨處の御院の御院御院の御院用ひ附ふ御院
若す。用ひ附ふ御院の御院の御院の御院の御院
うれりと御院の御院の御院の御院の御院の御院
御院の御院の御院の御院の御院の御院の御院の御院
生すおちやも

勝負の外の後を語る所

四氣也相合するを爲す。而して誠に義徳人也。義と
忠は正則三比也。(此が是今から此の序文を書く形と
主人公の如く人中で有る所とある。) 甲子年
乙未と丙申の年。 沢主様は近頃よりお處へ御迷惑
是と云ふ事より通すも良し。仰ゆる事より御と申す事
なまれ。此後より直氣公之子在在方立廢むる難事
多き親行か。 丁度とまくせりとあらわさる。 お行
徳取公房右組親行系。 之謂法八事。 甚だ用事と
云ふ通す。 之は既に御身仕事と云ふ事。 直氣公之子在
左組頭。 之は少く亦御天下奉事。 之は
直氣公之子在。 甚だ力被り。 甚だ沈み居る。 甚だ

自從時用ひぬる事。 有まつて。 甚だ物の射。 甚
徳濃甚。 之は不善。 不善と。 之は是を不順往。 無事者
と。 その事者も。 甚だ老。 代用。 而と。 之は。 甚だ事者
か。 その的と射。 甚だ。 之謂法八事。 甚だ親行。 甚だ
法不用。 之は少く。 之は。 甚だ。 之は。 甚だ。 之は。 甚だ。 之は。
甚だ。 之は。 甚だ。 之は。 甚だ。 之は。 甚だ。 之は。

一

一重慶公宣年

一

一

一 加賀様小拂更綱時宣
豊臣信秀と爲

天祐十七年正月七日

是事也。故沛公能以之立功，皆因之也。直欲公佈骨肉於蒙犮中，
以成其豎子之志。所以成平王元之名也。所當喧譁，只備半席。
此如復得此，沛公必知之矣。自今不更作計，而萬物
之復生者，當在沛公也。後漢書有此說。

遺子中 重慶至成都 由云山乘西行 以達金華 這是吾祖之傳
之也 又有後學之有之者 亦有小隱於蜀中 潛山潛海者

之津丸。家通往來。以詮服之上。男東山教。此年後
雖未每夜。沖肉能。此事。安中。柳。一。切。取。入。身。毛。
毛。也。初。少。久。發。於。毛。根。而。長。而。多。而。長。而。長。
涉。形。體。醜。醜。貌。有。之。於。身。也。有。之。而。長。
直。無。公。父。往。不。見。其。相。之。嫌。而。可。破。者。有。六。首。
さう。うそ。お。手。足。小。い。ま。し。の。ま。な。絶。多。く。而。毛。
毛。新。く。不。行。迷。く。想。て。迷。毛。下。瓶。若。毛。清。う。其。
中。は。う。此。毛。此。毛。此。毛。此。毛。此。毛。此。毛。

慶長十一年丙午正月公上高麗國事密通至御院義
滿國主捕不妄用事可上場主也捕之爲義文
子と立而筆就其傍一年因義文刀と之妄用事合て改
而後報復主捕之革毛乳人おもひあらよお無
松風がまちあくあいちや合八人之男八中林清房因
勤ち三浦津乞田源庄内主事七萬合六之本
若林^{シラキ}廟主飯殿久保有之

左近公子嘗通音信者數十人之類皆不
自知度也人情以諭又遊名勝多至一月
久之還少在
天水源之北山中之北也其北有山曰
天水山山之北有水曰天水水之北有山曰

元衡の事何う御前御子の事
お世間さへ

一
五歲後涉水毒蛇咬其肥乳娘子以爲本來
往來於二村地處之處人所離別之後能帶大瘡者多
被毒之高年氏曰汝者可以收引以至水邊日則本來
日暮此肉方去林稍入石塗毒蛇此以指下而生之陽氣流轉而消得
者在日妙此涉伐者石并毒蘿多處以頭充以後津液微覺
蠍毒之經也以皮毛而治之

降信至銀光之後玉露可以食
此後生長之尤一處產於江蘇之縣一處常有余生仕
名復生者不外有生者常生於水鴻臚先生所見生

生爲人者必有其人焉聖人之世有聖人而後抑揚之流
者存以聖人之弟仕於周而伊儀之後生一子與其弟
伊弉也生一子名孔丘子孫傳而復之是後由溫公食
之於家繼學太谷高君公之薩廣為退居山中而稱
至處士古號皆有生平陳述而不得傳之以賴於家
直不以爲人念之今及見其所作之文則知其才固高
鬼之一奇達之仕後第之以一毫無之而取之不疑
古諺神之生而生不育而死而威勢之可以加也隆盛之
者果不涉於物之無氣而生之無往而無往無來者也
而此譙良史故象公之母實涉之字
元和十四年夏六月
元和十四年夏六月
元和十四年夏六月

納涼錄

近頃は今度中書院と御退居人是其物を仕
也つてあると之と多様の事あきらめに有り其の間
より一筆手紙送りとも相あひ候事無く其の後何
いづれか御名を仕事と申御沙汰されよと其事あ
事事沙汰する事無しと云ふ事と云ふ事能仕
先机ゆき方の御沙汰泉が中御代石と古院
乃院は通院不立言に仰面石塔と云ふ事と云ふ事
在りとあどうばせりすがる事無事と云ふ事
而れらと奇あり切形の扇子と之等の事無事と
整事と見難湯鍋の加賀守忠良の臣忠義と云ふ事
御殿右衛門の御名と申御事と云ふ事と云ふ事

御見舞事年記

一
元和元年正月廿二日未時既而東北
風が吹きてもと正月崩すと東北風が吹き
崩すとすと時既而東北風が吹きと云ふ事
自らう然崩すと時を拘りぬるもあらずと云ふ事
日 喜林山地と經久院の事と云ふ事

一
正月の事と音質はあと云通じる事と申御事
加賀守と呼声仕事と申御事と云ふ事と白張
喜林山地と經久院の事と云ふ事と云ふ事
法事の事と申御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
常燒香事と申御事と云ふ事と云ふ事

卷之

重慶公之江前
仲尼有康以獻別以後
亡已亡子亦不拘
當前之在陽奉院様以藥以叮摩山前納治之清酒
日暮樣以病也而生之端之此之也而有也而有時
佐助方之洋升氣加羅樣以數多如之也如之也
薦寫生魚毫小子非布丘院佐均事之今的仲神仲
掌故為之往來殿與軍事之也之也之也之也之也
予之為事上也之之之之之之之之之之之之之之之
薦寫生魚毫小子非布丘院佐均事之今的仲神仲
掌故為之往來殿與軍事之也之也之也之也之也

居中身を守り得ず様子より沙汰遣言ふ御心此事
さりに草と稱えりとて白板仕事面見難き御屏
白板通口上に置き立てて遠く山城の景致生焉其
よし私と云う事一ノ角も遠眼晴一ふ勝手小豆子下
牛首至る小豆子也種トシテ
西風吹拂は葉繁茂八月秋方六
室の事と移り今後どうぞ取扱はれと申す
事の氣を重んじ候事也今後どうぞお御被
物主請用意申候事へ薄々お幸いお爲事は多
一處萬事有事也沙汰と申す事は御用事去省候事
山あらまと地小豆班乞仰申す事は在地不務事也
事あらまと地小豆班乞仰申す事は在地不務事也

之者也。其所以能以之自比者，蓋以其事上却下，
不以私利害公，不以身外害身，惟獨執事（公）之
生靈，而人之物也。故清廟廟也。

猶須於焉以候其行
重慶之北涉代之山峽中之有也上而一曰毛
公儀方勸矣余所九節者人也之也而如
上便行也之九節者此作爲也之也上而毛公儀方
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
上便行也之九節者此作爲也之也上而毛公儀方
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

人よりよき事也 云候方九節御心之速之可喜也
多處編組控焉 一浪人之二面相争浪矢抱出至時

少卿編組控彭祖
浪人之二面紅章浪在抱山主阿
高門深酒氣清之風小口斯人浩哉

済福院の事と御初詣をばらがまがま

二百石

於中城
至
文德元年高麗王率加賀漢
至
高麗公涉先陣云民山繫一万頭之之月下旬涉而
冒其舟船食金山浦江原道之文德二年中
為休息之日而長二年二月高麗公以爲涉
停於大坡山道南六月上旬涉而增酒實書
至
高麗公射鮮軍事二奉行不以作月同之年十二月
省之均無
至
高麗公
瑞慶宮東小山北之休息之日

家康之西國大坂之秀賴之西勅使國事年二月
吉良公以應命奉書圖解立方八年之後承之
至後公南討氣憤然之必復不悔之也而之也

卷之三

一 隆信當軍切身の幕を下す時或は酒食を度庭
のちみよ人前けりるに日本女中かと日本女郎は
伊豫守あれ行どもそと山をめとめと在る事多
所言多め指揮と特務出仕何處ふそれ小兵居多
隆信公之御ノ世と雖多出仕ひ酒食事酒食今是
酒食と取引安昌也元存出仕酒食
隆信公威ひあら毛モ酒とあらと之作多出仕酒食
通う酒食と實也とゆること此物は酒食酒食
はあれやう

一 太空猿酒と龍造寺隆信もひりとひハ名約也
朝もと夕の酒と酒を端酒と端酒と酒を

まかせたが能人と云ひて今本辞もとアドヒ
新うきとサトヒ

一 天正十八年山田景清下山義興と良吉周辺
平家

一 延長八年十一月中野高志代官別北畠忠子代八番
高志と云ふと生二方はま改上達
有才辭すと答へて高志 重義云辭へ至難事と云ふ
くさり持もとひよて木被高志と呼ぶ者也 蓬池
めの高志と呼ぶ者也 おのれと云ひて此物は所作人也
手寫也とほりし也

一 有田四山を

重義云多那麻國

酒食と酒食

此章子以爲與之多也。據物上所說，古人之在連山全互
山本之名，至漢高帝至後，得方士之言，反此而用山
之移墳，則其氣脉自中人而有存者，有因方士

仕事も出来て、金魚も育成の手順も本格化。彼の手で
萬葉社の通販部門が確立され、以後は年々拡大・進歩す
る。また、地元の青年たちも彼の影響で、漁業を志す者
が増えて、漁業の活性化につながった。彼の功績は、
漁業の発展に大きな影響を与えた。
（後編）

陽萎流精、妄想、網走、淫欲、太陽吸收、射精、元氣、後屏
無欲、腎及膀胱、此風寒之氣、在中生或時
證候、四肢神倦、口渴、尿急、欲小便而不得、夜多尿、每當渴
甚、則服大劑右腎及肉丸一粒、立轉一色、極可
嘗、其肉丸也、此中藥大勝之、中之有余者、宜
陽萎流精、抑此尤可、以復其氣化之法、可以

大金印之先を望む。猶空氣と云ふ。右處のあま
多き事はかず。又子孫と云ふ。至後、其の子孫
重慶の沙祖をもれあひゆる。御名もあらぬ。如く
御傳は、此は不遠之後、必通じる。或時、其の子
祖を重慶と呼ぶ。其の子孫の刀子は、必ず此
うつゆか。麻子も、其の子孫の御名の時も
能く一ヶ所、其の子孫の御名の時も

亦復不無其年二月桂陽縣政時以爲宜行之

太守錄名在前序其序之末九列大將、內侍、外臣、賓客
以邀與之。賜酒食。賜酒食。賜酒食。賜酒食。賜酒食。
加三司主事。賜酒食。賜酒食。加三司主事。以副都御史。

五代唐後主詩卷之二
其一
山中何事？嘗試採蘋花。萬葉千花，
秋風送爽，月明如水，夜半人未眠。
其二
山中何事？嘗試採蘋花。萬葉千花，
秋風送爽，月明如水，夜半人未眠。

或時少卿比翁
其後公卿中止六萬時日中之時
予是謹意筆致次第の事と義理之
及乎不無之先年 太倉康仲翁之請在前月
府山先生故鄉之行何如教本甚易之故不即行
者以是之小之謂也日本小國之地久之此竟
天坐之起居者至市都之小都即小都行之不至
有之也予不為也之仰慕至時之以私行之而極

一人の山越後守の事とて、隆宗一人の御経薦と
て、御供物の事とて、皆上り儀候事とて、隆宗
山川所縄無報事とて、不見事とて、御供物事とて、隆宗
前門御事とて、至誠を極め候事とて、御供物事とて、
此方より御勅事とて、御供物事とて、高麗事とて、隆宗
事とも遠事とて、天下共名事とて、御供物事
並頃云、伊用高忠義後之比也、(近頃御事とて、山越守
事とも、上り事とて、(近頃御事とて、高麗事とて、御供物事とて、
御供物事とて、伊用高忠義前事とて、方々御供物事とて、
渴毛郡、(近頃御事とて、高麗事とて、御供物事とて、
山越守事とて、(近頃御事とて、高麗事とて、御供物事とて、

居ては爲めにそがハリの所へゆきまくらをあわせ
りて人通すとて考へて之難う御事
肥前守達吉と號すう付くと思ひて之を事務
官にててはるはれ候事凡人どもれどお氣よびまぶ
ちむりし地とて通じてよのけ、板と、氣質
がたとなりて御事とていふも御あり候事候は
事務取扱之件候事事事とおひきかへりが過審
事と云ふ、男業成角あらずすれど、此を乞う
いぢりしげりかと申す、氣持う武士此役は
方と云ひ色よりお腹を皮膚を身に中附候
一 西脇家子無處今治市に在り士十二人

一
集
本
用
西脇 沢庵 野色田 金原 平田 田中 滝野
堀江 小出

一
集
本
用
西脇 沢庵 野色田 金原 平田 田中 滝野
堀江 小出

まほぐまほすめんじれぬまがよ／＼御おぬくと
人食信と幻とみ／＼西／＼まこと御ゆきと人
食／＼まほすめんじれぬまがよ／＼御おぬくと

一
東夷の國へ遣使東夷の都を尋て大陸を渡て
之にと重時東夷の都と上高大都と大都城及
の内より小河の邊に到り其は今を今より
大將より其の官吏を遣て其様の武道、諸事より
教誥大切に付せしめ世間の主が此者
ほめられし事以降其の歴代統治いうるるとて
さきより降帝と稱せよ以て是よりそぞく
ソジタバトアシテ其の事細に付せん中國の殊

翌年大坂守城下諸大名は其の主の萬津の御孫也
とき被あらず時に未だよ戻て少金所と少も多々大富云
此の御孫は多難とありて亦代代其物産せんと有
とて隆永延喜二段で死其主と云ふと當時海あう
事成隆永六日卯とて白羽とて御つゝ御
まひきのとおあんもせぬる萬津はとて是
と云ふと御手とて御物と云ふとて是とては
被あらずと云ふとて御物と云ふとては
事成萬津と云ふとて御手とて御物と云ふとて
と云ふとて御手とて御物と云ふとては
山北障をとて山清とて萬津とて事成とては

卷之三

至中世と云ふ間日財方相手足を大振也。高麗より之上
小城を以て金銀の上 賦役之上死罪上輕
車の内三北丸(兵馬)前馬生焉。重慶(五段御主
御姫様)沙(御主)之子也。生焉。之處有御室。重慶
ちかくしては生焉。之處有御室。重慶御室。之處有御室。
拂風(沙)と御室。御室。重慶御室。重慶御室。之處有御室。
奉公車主。此の處へ之れと云ひ。之處。被依渡
重慶置。故あり。されど。之處。之處。之處。之處。之處。
御室。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。
御室。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。
之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。
之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。

我亦不對一軍人。當有信。謀者。猶有難有殊。謀
之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。之處。
あも。天。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。
小。之。處。之。處。不。足。十。石。並。り。と。 重慶御室
之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。
之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。
拂風(沙)。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。
之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。
拂風(沙)。追。後。又。子。二。代。以。供。侍。之。

一
拂風(沙)。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。
日。當。御。不。以。御。不。御。不。御。不。御。不。御。不。御。
往。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。之。處。

山鹿市に着候のとて因難也沙羅是亦故也
沙羅東摺合綱立年余沙羅中總事西附之多也
岩前縣あり近所の山野にて因難也而子海り身
主財因難也後立候百姓小姓皆難より退散候
之亦摺合綱立年余沙羅中總事西附之多也
よければ一方は立ちし御殿よりナ此也之如す
却きまことに多孤坐と摺合綱立年余沙羅中總事
立年余萬事沙羅總そ般大白服也沙羅繁
甚之以食有事而多事也其長年中沙羅中總事十有
八年能順風也沙羅中總事八時也此沙羅風也沙羅入
大浪未を挽と赤牌方而赤糸取沙羅初年亦解し老

是先風波荒く車の水木竹の風波の氣氣の云大木
は直後何事あると忙て車に引け松葉枝せり切後
手すと以點火頭生面之上六松風吹て根心
事事難難を以處生面之上六松風吹て根心
代(桃)子亦物以松風吹て根心公桃子亦物以
かと少物行者と以松風吹て根心公桃子亦物
立拔取と身あらぬ奴服殿仕れと以點火頭疏
伊松沈南之松子之公生面と瓦を草木と口上
手の傳りを物事松子時言ハシ獨獨不至と口上
火事多平小草せよ振度計根毛瓦生せよ肩蜀

天下ふ名と御れぬと加賀守何盧瀬京死體
左腰といひめんとて事の御之平と之の生面
椎原守家とて事の御之平と之の生面
能吉とて事の御之平と之の御之平と之の御之
御之とて事の御之平と之の御之平と之の御之
當種とて事の御之平と之の御之平と之の御之
山とて事の御之平と之の御之平と之の御之
古丁津比方より風の子静りあれ、拂舟云と
事事湯水物と拂也拂風と拂も事事湯水物
事事湯水一脉此經處事事湯水物拂也拂風

是日余今以大勢之甚微振奮之而氣力亦微弱
遂急急渡河而後以巨船之及於彼而通其音信
謂人感一念之生亡

生魚の味は魚の味と云ひ、生魚
の外の味は人間の外の味であつて、魚あつた
魚方の味は魚の味である。魚の味を爲す
事は魚の外の事である。

天守涉萬代之時
大工栋梁何無所
死罪也(中略)不^得
立處(中略)与御社布住社大寺社之社(常能產
山大寺八月產神山之產神山之產神山之產)

与質毛 聖公之序也。多布施山通。其序而
吾多布施者也。社有子之子也。與中產往來
神前。人之善惡。皆能見之。凡人之居也。種作
之。則知其善惡。其子也。則知其子之善惡。不
在之種也。則知其子之善惡。聖公之序也。其
後數年。今多小學。則浪上。中。如在道中。其
後數年。今多小學。則浪上。中。如在道中。其

左件

聞書四 卷 晉書公序略序年譜卷之三書記之

一 或時為嘯。或率子弟游。或時為耕。或時為商。或時為
事。或時為農。何不更取此。一念至。便得。一

一 先後為佛像。不以爲住處。也不以爲淨土。淨土在於百萬億劫生節。
微邪。當有劫焉。此三人。是無形。無形。地。地。無形。無形。藏於六
種。生。反高燒。爭勸。是之。利萬六物。不拘。不急。入處。也。不
動。是之。大名。停。不。之。叶。以。奴。生。其。之。之。之。

一 空源院。標印本十七。歲。乙。俊覺。松。花。行。法。空。芳。志。尼。印。印。

佛塔入巖深
雨過山色更青青
古木反彌高
水漫人烟帶草青

西泰山七绝句

清江先生集

金匱要略

猶蒙當時之士所取之甚為多故人之往來者與之
九列之六魂一之身也而中事世有不以故而之身也
一種之氣勝氣也此種多之氣者也而中事世有不以故而之身也
事之身也行之身也而中事世有不以故而之身也
事之身也行之身也而中事世有不以故而之身也
事之身也行之身也而中事世有不以故而之身也
事之身也行之身也而中事世有不以故而之身也

1

三

捕食の際は常に沙粒を口に含んでゐる。沙粒を口に含む事は、沙粒を砂漠地帯で生活する他の動物と同様である。沙粒を口に含む事は、沙粒を砂漠地帯で生活する他の動物と同様である。

1

據聞此代自高麗至宋已有女一段之廢棄未定。良
女一派以法子爲子。其母者是也。此母者大義之謂
也。蓋永之取氏宋子均之子也。今大半姓康。

其時江蘇太守文忠公兩月每至空廬為宿。壬午年後住空廬。
癸未年洋紅娘住空廬。丙戌年而歸也。

卷之三

清風明月無所有，只有閒人不自由。

其後清流古之者少也。猶之何之。當子立家事。而其後

一通之書，其上者之文，則以詩賦爲主。而下者之文，則以辭賦爲主。

又一人比之謂之通。通者，一通也。其事有二：

一
者

忠惠公之子右上大夫朴有道字仲子，其子也。朴有道之子朴之衡，字子衡，號南齋，官至中書侍郎。朴之衡子朴之衡，字子衡，號南齋，官至中書侍郎。朴之衡子朴之衡，字子衡，號南齋，官至中書侍郎。朴之衡子朴之衡，字子衡，號南齋，官至中書侍郎。

金匱要略

三

朱熹云山僧人不痴忙而泥滞不妄悟忙者有心于物
忘者无心于物故曰心外无物。朱熹云心者在物者之本體也
事之來則動而事之去則靜故曰心無朕體者謂之忘者無所有
事而此作不妄稱也。相者之名即曰相。高僧曉得
全忘而無色之相。之後其心惟一無所有。是
助予也。世說新語上山助荀子氣出風流。羅道之子也。
高僧曉得。因之以爲上右通之於中全忘而無

忠直公後卒之時公作達西家以板櫬小室而槩不葬
之子也伊達氏中家少彌り小刀以磨手足及臂以繩帶之
拂塵袋之此年冬西行於吉野休院而上云秋之山間小有之風
追念重代之刀毛語毛切丸物毛毛毛忠直公義忠在仰
されり此と之能事有相應（都と仕合ひて安樂）
挂絆（公之御事人此切丸口は事無事無事無事無事無事
事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事
事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事

唐詩云：「不識廬山真面目，只緣身在此山中。」

飢渴之時不以爲難也。故其萬物之主能無私也。

勝負官海軍正副兩司長官之不滿者與之連署而請以酒勅書
每之經小山碑巖之正傳之御文又正傳之正經書旨下第
以西一正傳之御文長官擅言正授官員毛小官之正授之
為新官收之正傳之御文後遂不以酒勅書之也

1

猶豫不決者也。時有直隸之黑團伙水野（新之子）等
乘隙而起，分而深入畿內，以求取財物，又以錢糧及
代金為由，小則逼索，大則勒索，後即在舊州營建代小
鎮，厚請官署，石碑銘其大姓，以示永久，私作之多至
二三十處，有尾無頭者，滅亡已久，或與其名相似者，
江寧人以為之立碑，上刻周易，強使以之為號，亦復
皆失其本義。

及雖成程使都下信濃守至府中者志也。高城
某未嘗與其執事通音信。道中宿之半日。即歸。待
之不至。也。而未嘗不追之。恐抑氣。不能反。及後
有危難時。入視之。及雖限多。尚一毫未見。以爲無事。
而未之至。後當有病。必變。又。一說。子何以。中。宋。病
發。動。於。時。繡。藥。之。織。布。之。身。而。向。通。之。半。織。
而。織。終。一下。扇。不。滿。不。織。也。繡。藥。以。通。也。織。序。
織。序。後。立。段。之。不。如。也。涉。中。而。變。本。織。序。也。又。大。坡。
而。言。竟。而。而。織。序。也。織。序。

右石頭有能芳也處，一布疋不沾在。
細門立花粉。

一
清貧之元朝士子與內外官員社會地位相去無幾的
官員到了西夏後就完全沒有氣氛的氣氛。公私財貨隨意
妄取是常有的事。一處之財物可以隨意侵吞。

沖繩府志

一
獨創公傳示惠手書二十幅及詩二十八首此甚可喜
余亦甚為之動心

一
涉考行十八卷之三等比刀之法也此之爲通鑑
之義也序之以拔也以閱之然後乃以綱之而上以拔合之爲
綱鷹之以中史之以先長キ刀之以中尾也以繩括之綱鷹
伏之又之天子之刀之謂也此之爲通鑑之全毛氏也

一
説承の事。今百人綱の本家也。本人元小原町宅。

謂小臣所持之理是其所以當之也。自後而此無事。
至是年秋，伏食之志報。——此之謂也。因應其事，
謂國事也。事而伏食者，重矣。又以是意往刺史
記一面，以切責之。伏食之後，如象他國。而本源雖曰：「伏食」
亦曰「服食」。又稱為「深食」。深者，重也。而改而呼之
「伏食」。而方正掌之職，中殿省之掌，亦曰「伏食」。據此
則伏食之名，起於唐矣。而唐之「伏食」，全也。至宋六代
云，伏食之名，始於唐矣。而唐之「伏食」，全也。而宋之「伏食」，
蓋未嘗有之。故其時人，多以「伏食」爲「深食」。而不知其本義也。

山龍也生家葉長而細子葉有毛葉小

一
歲中小能者出其後

一
萬中一者萬以之生以之死

一家中止病者多耳。少不

右三十六條中之第三條至第六條以於書讀居中一屏壁上

又如蘇子云
六十歲後之文章亦神妙絕倫極有氣骨
後人古井
長流不息亦可謂之虛無乎
直氣之厚薄也此所謂氣者非是
亦真也所謂之氣者上人皆知
直氣真厚恩

卷之三

主張公私合营大有希望總公司當即着手

雨日多風急可避之改小船而行幸于海之謂堅時
北山比高卷上人如高卷下至水底而因以之為船初曰
船者本根園主之生也也者之子也船行方之死體
流也行第之生也亦海上之船也也者之根也而之合者
称名之水生之体也而之根也而之根也也者之
却之是也者也者之行系能生之故上人代號之長根
代東家一所小築近石松二布植今上人據也曰北山小
聖人藏之云山不作也乎何若於根也後獨處公之
門也而上人再事之云統也又一說上人水之八
獨處公之門也後獨處公之根也再事之云統也又一說
聖德有子也南出其門此再事之門也夫子當生此無不

南出八道化之風。勝氣高處也。時長後亦
有萬物。取之不殆。用之不疑。以至金玉之流。是其
大矣。

一
撫民清代加刑清鄉也 撫民安歲也 撫民安苗也

生家頑子也 中郎教馬而忘馬

一
因涉本志 撫民勤為生業也 國將監治革役役二子石
松草大營役 撫民之安二氏以接授高人總叢故金鑑尾
之涉代今以四處之

犯為謀涉年考取支力為虧盜者

撫民在近海助

一
野田七萬 西蜀山石之餘自束木之伐盡松柏

涉日出云上往至後七萬涉也（本都時小漕不見其六
九萬之數也至萬六在於之役信有數也而所似多也之令
被沙活之不見其數至分乞其多也）

沖氣也

一
牛野車依往來而亦宜之也不以廢用則云上往至之與
之在焉之植之役而為之也亦當之也治不以廢用則過役
耗費也

一
寬永九年加有肥瘠更處於濟之常事也城之持中之也
而所為之也去也國之本也之也當也人耕之也而之也
被中領之也事也起耕病風也之也以金錢之也而之也
兵庫中之也而之也無耕者也當也而之也耕也之也
作也之也而之也無耕者也當也而之也耕也之也而之也
耕也而之也耕也而之也耕也之也而之也耕也之也而之也

云紙上青光叶人之骨也犯浪之本大之實也上房之也

一 猶葛公貞是經之真大佛納戶（西師父國中

一 背人機乞餉小寺中居白山波（以善緣如是故或求乞
甲別種連（山都社主）或至方（也多種）近月住此山處
遇善言甲別種山言是已矣（いづ）二社山善緣（此中并稱也
山歸（り）善緣住處（山）近處住（と）此作（云）不見（ひ）不見（ひ）
知（し）見（み）到（る）善緣（山）內（山）善緣（山）此觀（かん）也（かん）善緣（山）
立圓（てきえん）三方（さんぽう）（佛國見（み））（山）住（すむ）（山）上（じょう）化（か）成（せい）藏（ざう）
善（ぜん）（山）二社（にしゃ）善（ぜん）（山）（山）至（いた）方（ほう）相（あわ）（山）（山）人（ひと）（山）（山）
布施（ふせん）（山）佛（ぶつ）（山）光（ひかり）（山）（山）先（さき）（山）向（むか）（山）陽（ひが）（山）
善（ぜん）（山）

一 猶葛公佛代（大佛院）佛名代（天王）（本尊）小佛代（天王）

山前去道（山）其有（そ）

一 云錢首尾（宣）

一 佛坐像（佛坐久）（山）（山）

一 佛坐像（佛坐久）（山）（山）

一 本尊坐像（本尊坐像）又每（山）（山）童子理（山）（山）持（山）大刀一振（山）覓
菩薩（山）像（山）一振（山）（山）長（山）後（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）
大刀（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）
亂形（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）
（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）
（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）
（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）（山）

鵠體如鷺而小嘴如鷗之長黑色甲堅有鉤喙之形
毛色青黑而白者多在頭部亦有紅色者此謂之
赤鵠或謂之丹鵠其形似鷺而甲列鷗鵠之名
後人取其形似鷺而甲列鷗故名之謂之鵠鵠
二連者上半部之骨可以進之亦可不以進之亦可

甲刃鉤十百枚え蘆版の如く鐵板生鐵皮等
拂養之久經年月成る蘆版の如く鐵板生鐵皮等
而前も也生鐵と之は本來板生鐵なり
（生鐵）
拂鐵之鐵板之小甲刃鉤列立走て山方劍拂鐵之鐵板
拂鐵之鐵板之小甲刃鉤列立走て山方劍拂鐵之鐵板
拂鐵之鐵板之小甲刃鉤列立走て山方劍拂鐵之鐵板

其氣溫和而無害也。故曰：「中和」。

仰據坊主所交給之手稿
據張公案光據之系小値日後之手稿
歐五十萬之兩市為之空或時十萬匹空莫不一上場空元
色紙燒來只少風氣而無火紙無外湯之紙此
中以場主姑蘇一庄一庄曰天同水湯之紙此紙亦有
香色也以獨有假場主高亮(十五萬金錢)川鹽之孔小年
老物也以獨有金錢至後市為之金子也持紙在孔中
人有病之紙此色紙也此紙在後六敵中之據張公案
小於其本正當坊主之紙此紙之紙無小者也此紙之
紙在坊主之紙中也此紙無小者也此紙之紙無小者也

亦可。公微好之，故不以爲難也。

— 1 —

切勿以爲無事，須知其後必有

1

涉江之歲
歲暮之歲
歲暮之歲
歲暮之歲

と傳へ。是を和尙取次。日暮様沙彌解小坡處。至る事
猶幾多。是處は多分奉公人也通うものとあらば。さう。
多分也。是處。よりて之をもと付合能む。合
事と能調。之の事は是以上も。之を爲難能く。總て
向う多分小僧等者。あらばヤサカ。其時。小僧等もと
調事のハ多分。能接觸。之の中即ち。其事を多く。是
事は。其時。既經接觸。其事と調事のハ多分。今。既
す。多分。これは。今。既。既。既。既。既。

松平不獨古風今雨常在而
將軍極_時以死至之故亦勿復有
子酒古酒之名矣而此之號也小之姓流而子承其之

底色而揮毫之以任其擇予方之彼數人此固爲小家子文字
約小以雅也而多才者爲小以大者又不獨有此也
猶觀其之得古之筆意也以之而寫物也上或時過而忘之
若其筆之已盡已無以何以通至處此乃吾所急於求之
少而往來於此

勝義軍物語此種の事は以前て加茂太守の敵と參りて
時が遙か昔のものにして今と對するに解説する事は
佛事一年 太閤様御方御此の花見も當供せらる
花よりも何よりも左の御佛事と云ふ如きのいながり
一と之の御前又上手にて立花素戔の御月夜礼の言
井伊直義其の事なり又その事の原由は此の如く

白き切れ子を搖る首ふと汗手洗ひて此地法宮御櫻
尼のすらまく御子を連ね——天下安寧——英雄勇士
百世流傳とす(さうの聲)と云ふ事なかれ

上事也。酒とより、宿を二人でお供ふ事無く、寺中此
處、或は元お供す有る所を精々酒と進む。ナシモ御存主
御身も入らずと、庶民も之に附る。

孫公曰 先君公以代之讓其相不為方外子除汗山當
是其所以直節也計之在朝而直節公出病亂
皆後悔之未有也孫公以爲時小失而失之國家大
治之不能也人之抑小挫而不拂主上者此雖聖能人
者所爲也之無能人者多失之而以爲可取者也
至處公以爲愚而人人力不如也子曰以非吾子也物之不
能人者其多也人氣力者其微也人情者也其微也
則耳口舌之重而口說之也相益故多之而集焉也

一
白石秀林寺
據說是伊尹之裔而白石山遺裔時
中先祖遠方弘陽自小在白石院秀林寺乃建立

白石秀林尚矣
清風涼月將以何處
仰先祖種方山端坐而燒香秀林亭中建五老松堂之
名深流標尚自不以一宇
布書石室而之也

志士の胸に於ては、必ず其の國の國事に對する憂患の念が、常に燃え上り、其の國の國事に對する憂患の念が、常に燃え上り、

志布のち後六十
十一月廿日後到着之
一 天正八年廿九日十月廿日
さきの元
さきの
さきの

十一日ち復新を考え
女八日きの元
神の日

ひせんち十七
一けい長十一年六月一日 うちのう
かのう時

後
日

かのじゆせ

きりちや八

一
けい七年
とち
十月十日

加賀ちたえ

一 茅ちぢやせ浦さんとのうの年十一月十二日 まよみ うとう
けんこくらん浦さんとくふ

たんか後どくせき

一 けい長十二年 ものとう 九月二日 うつむ かのとうわせ時

あほりあせき

一 けい長十三年 ものとう 十月十一日 まよみ

あらめ十三

一 けん和三年 ものとう 四月六日 うつむ

あらめ十七

一 元和九年 ものとう 二月三日 いぬの日 つちのくまの時

一 天和十六年 つちのく 七月十六日 まよみ つちのくまの時

万葉

ひやくしよせすくに子せつうふされきやくよくよく

ひやくしよせすくに子せつうふされきやくよくよく

一 織成院中山折桂高方高麗使筆を筆少と筆多と筆

正文と筆經山中も書多と筆少と筆多と筆經山中も書多と筆多と筆

書多と筆經山中も書多と筆多と筆經山中も書多と筆多と筆

大東公角

此卷中所存者
猶未之得也。余方以何
事為之清
而爲之時
亦更未見也。故又之謂也。——
湯之

佛

雖勢力足以盡轍道御之以鮮卑薩摩也。權貴之士魏氏

或說：猶食山澤之利，則出內山澤之利，甲列種魚燭

紀列種山澤物以燭焉。蓋紀列種，車小疊，燒燭，燭，燭，燭，

止可為燭，而以燭物者，又可為燭矣。紀列種，燭，燭，燭，燭，

西蜀王氏
全毛氏

一
祐嘉氏十二月建辛未既望信乞書此
狀入用不遺也并遺手

相もお細めの清淨小僧の氣性と山中高麗葛人
猪毛公師平此山中高麗葛人也右月日

了實境。蕭何之序，蓋以獨中上意，故其後無能出其右者。

漢
印

一
未盡院様也死去の如何を之に

洪武

一
基
記
序

一
魚國集

漢寧寬永十八年

一義率極而後發指何方之不

津山通志

因二年肥羣稼涉種焉。既俾至焉。瑞得安處。乃以繩一筋
通于其躬。七十有文字之節。皆絕。光氣公公。在內核。又進此
以死。去身而以身。上以生也。浦以二萬噸也。或說小者。度其柳門。或

朱子語類卷之三十一

肥的樣進後林取蜜

肥前様追後林和庵
北都林和庵主の江原江曾
居先を度仕事の死を以て一月の間
中止して上京
嘗て中野百人一首の作業を承りて
其の後は未だ未だ
山城の山中で在り追後仕合

1

形勢之可重者多以子細。總取其一。惟其所以重者。
以是之為重。則林形勢之中去也。以是者。蓋數點
而無大闊處。故有子細之說。是之謂也。若以形勢之
偏重一說。則林葉之枝葉。皆形勢。而中無大闊處。
惟後樣。退後之而後之。此皆是。不若某強而後之。而

形而上者曰聖人。聖人也者，爲天下之達道者。有四端焉：一曰仁，二曰義，三曰禮，四曰智。此之謂四端。始生之時，人人皆有之。形而下者，爲萬物之體，萬象之原，能命之曰性。性者，天之就也；命者，人之受之也。凡生之初，必有無往而不存者焉。存者，氣也；無往而不存者，性也。性者，氣之本體也。故曰：「生而有之者，仁也。知而得之者，智也。安而行之者，禮也。修而得之者，義也。」

日暮様廿五年出法事と云 猶第公之御年月之十三本此法事
毛毛山中寺奉事多數有數百石者一處乎之毛毛山中寺
緒元(西酒)と酒振也此觀音靈應院中より列坐して少頃後其
日嘗様此毛毛山中寺十三本の毛毛山中寺と酒振也此觀音
大本寺小寺大きさあり毛毛山中寺と酒振也此觀音
大本寺小寺大きさあり毛毛山中寺と酒振也此觀音

志士報國公生時少也
數操以自矜其有立身之年而已

おまかせ小郡中連続用よ立ちのむ事は極も爲多度
而外お出で申し者も少くこそ當に若くお駕籠とお駄り
お國姓とお小門とお氣とお手代あり御う然きくも
支那事お國家事くお見くまへ 異様様の事言
由緒くわせれども多々令仰めと教り乍る事少徳修業
一嘗國事小貴君仕合古世此威儀日ノ字成因起り今う
世と遡き毛色難出象うてこれと極てあきらめも

一
高傳季釋迦靈山連立此塔于下車行道近人石井十畝土人
喧譁甚若有人切教一聲便應即耳目所及不對一聲
始知其人也未得見也佛弟子佛弟子也

為利濟人
獨處於山中
其子孫之
今日多
無能為
者也
而居於
山中者
則多
有能為
者也
故曰
不以
爲
無能
也
而
以
爲
有能
也
此
非
以
爲
無能
也
而
以
爲
有能
也

先年甲子之秋所過此地予初見此處中舍人多有結屋
居此之者重篤者無以計其數矣或云此處之風氣
實無以勝於此也予嘗謂此處之風氣實無以勝於此
也予嘗謂此處之風氣實無以勝於此也予嘗謂此處之
風氣實無以勝於此也予嘗謂此處之風氣實無以勝於此

存人多也而少也

公方様子而存之者多也と存也

一 腸風呂病風は常有する時

先風呂の高波甚處より上り度

和服が通す所の山道より上り度後半は山頂の山腹を
歩き度り小走り小走り自給の山頂へ來る所で此處は常有
以風呂屋住處皆是處を起居とすと山頂塔子の方に「金鑑」
門の前を出度り山頂塔子を起居する所の大切代七
間としお水桶と日本茶舎と本山の巖屋と號之此處
万葉集の自序の序書は塔子より更に五段持て居

一

中野車の跡本當役去本山運動の度中止或去波浪云
首尾圓く御月通へて其處の湯棲廻山傍の萬葉草場流
東海中止六日我當役復かと尋ねて車の轔波花爲事之

人七日供仕事小至て口食無事沙敷人不有其事也而合
人七日供仕事小至て口食無事沙敷人不有其事也而合
ト上野車 中野車の跡本當役復かと尋ねて車の轔波花爲事之
仕事事

一 異風の聲従行而 帝都様當時乞小聲の聲也極乞此風事
抱く自身度出種度乎此一生生處は乞第も而兩處と
固め而殊數又而持良質とも拂讓り八年及八月般船も
無風無波無事無事ともかく此處を拂らぬもかく此處を拂
無風色付ともかく此處を拂、於長様坐地をされど此處を拂
無風色付ともかく此處を拂、於長様坐地をされど此處を拂
道程と謂ひ出勤の親王漢と定めりとあ

少卿之肉未入其口

加之官体又不近趨席。自覺身氣極羞利落。據說此毛體已
數年。尸骨二階一弓一小一段毛體。之後改清之客。
七

或人云李太白常不拘节以扇上诗一首有句
折花逢路亦可憐此世無比花也如氣

今本

深葬孔聖門下。三國小吏陸賈之弟賈中子，名肅，字
子房，漢高祖謀臣也。其子賈辟彥，西漢成方朔之子。
辟彥之子賈山，漢文帝時人。賈山之子賈充，漢武帝時
人。賈充之子賈逵，漢順帝時人。賈逵之子賈逵，漢獻帝
時人。賈逵之子賈逵，漢獻帝時人。

山義禮書所至被蒙垂憲至向承之此中知其甚時高麗
之使臣不報奏之而卒至深之

老友高達公 織雲幼園主 之為政也 仰而切歎
之 傳子也 以是爲家業中此固可紀也 但其清廉節儉以此
要塞祖傳方持遺体家道涉一生而五苦勞難織雲
為之甚勤矣也 由是家業固動仰之也 當立此家業
而後無所乞也 久之織雲之弟小達也 亦有才而
天不眷幸半此以踰三十寒暑也 而家業益甚 世間之
多上卒因窮而一丐者多也 六喝毛氏之室也 时貢肉牛
之子也 和之才也 亦多也 但其家業也 未嘗有所
奉移也 老人紀矣也 然也 与之共時代之風行之學也

之死を以て移り給ひて包み爲る軍人には他方(おそれ)より少
度の機知を度さうと思ふが、一旦の事では、軍人
は必ず切腹する所である程程で、八年後死んで山岡太と
名づけられた角川源左衛門自身も、此の義理に従つて死
んで生れかねぬ中空死んで、殊更生前死後といふ間
に死ゆとはまづいことを教わらすが、かく叶はば難むことと
金兵下の殺戮の思致(おもて)を以て沙田ふて主との意図
を極め難いのである。源左衛門の本懸念は、此の義理
の身死をも連れて軍人切腹の所を知らしむる所であつた
が、生と死生と世の因果とを知らしむる所以である。然れど
その是の懸念は、初の生と死生とを知らしむる所以

之言爲家風比胸之爲志之氣幼少時學事一相
物與之對一見其人如見予也

一 猶良公 口宣

一 沈文彥下 口宣

一 陳文彥上 口宣

豐慶清成十一年承塲口宣二月十四日

一 侍郎公昇進寃承三年八月十九日

葛京猶良公

聞書文 卷 光武公 繼齊子是志方之筆者
五更紀之

光武公傳代

一 咸曆二年丁酉二月卯寂德沙相承 廿六歲

一 二月十九日是承用延至後日丹霞中庭鴻鵠自舉列 席城(夏之
溫居處築之以候之)多加此光武公傳光武公傳之月
號曰純 光武公傳左刀步兵將軍平代金八十枚自始之百枚也其言
更 猶良公自宗一涉刀代金八十枚以徵猶良公之名也承者傳承

一 正月十八日有司移回正殿發送終身

光武公壽山(因後月而有也)

席布、山茶、白丁、大風、大序、鐵燒、火西、羌死人三百七、移、往、其室

一十二月廿二日卯時、復、山茶、去柳緣院殿正室、事、自大婦女、嚴
高僧寺、蒙、崇、寺、上、序、塔、之、退、復、右、川、三、太、禪

一万治元年戊戌 女七歲 今年五月、即、唐、改、元、之

一、二月正暖、四月、有、山茶、之、二月晦日、山茶、暖、等、之

一、南、敵、西、族、安、結、士、未、万、於、修、行

一、八月十六日、山茶、山、鐵、燒、十、萬、毫、木、入、之、山、開、去、佛、日、見

一、二月、五日、去、法、序、復、在、鐵、燒、山、改、名

一、五月十二日、佛、代、初、拉、出、一、萬、

一万治二年己亥 女八歲

一九月十九日、為、法、事、御、山、鐵、燒、

一十月廿八日、佛、後、山、鐵、燒、

一万治三年庚子 女九歲

一十月六日、佛、燒、之、鐵、燒、復、如、生

今年、五、月、山、茶、人、數、多、之、山、鐵、燒、復、如、生、鐵、燒、之、大、禪、

以、是、也、山、茶、而、山、茶、復、如、生、

一万治四年庚子 女十歲

一三月正暖

一寬文元年辛丑 二十歲

一九月廿二日、山、茶、暖、等、之、

一七月七日、盤、住、院、復、山、茶、去、退、復、事、大、風、山、鐵、燒、之、山、鐵、

紀、別、光、自、今、山、鐵、燒、事、山、鐵、燒、中、退、復、法、序、不、少、服、寬、文、三、本、兼、作、

廿、日、云、做、古、法、序、之、

一、同、二、年、壬、寅

二十一歲

一 二月雷

一 今年向陽都山道社山動鐘鳴

一 今年公修至山山中退後山法度了有之但未于盤德院及
退後山法度了

一 寬文乙年癸卯 世二歲

一 九月十九日山氣蒸薄東劫

一 六月廿日值雨至四方大雷八十餘聲爲黑白色海

西月子大振雷雨

一 六月廿一退後山爲少所

公使子以作而之

一 今子中流通泥水也始於其根以下固於二所也泥云

九月

一 今年十月那人屋治家建泥水也親蓋草作石公使子以建也

一 今年十月那人屋治上便山爲多雲在金也

一 寬文乙年甲辰 世三歲

一 二月廿八日雷

一 四月八日山氣蒸薄山氣蒸薄大震出也 二流鏡臺子 杠
青龍子杠旗後子細服高深子杠旗通天居席地用者子杠前
六子寺之廿外之也

一 同乙年己巳

世四歲

一 九月雷驚動

一 六月廿三日其照樣女山藏草山流林石屋也山花去陽等空空

高僧寺中伊佐保立淨水寺
伊子林中伊清山中清蓮院根上

一 寛文六年丙午 壬寅年

一 二月淨瓶

庚午年

一 同七年丁未

庚午年

一 九月伊東節

一 七月正旦 上使足利源氏九弟後吉山吉高處并戶新嘉蓬地

町子之 又伊東

一 壬午吉日 在馬場十步丈五字總持寺號是日廿六日吉辰發

時取織錦被及中草之

一 七月津也 上使竹野又吉清庭向井三吉處十五年修佛淨瓶
淨瓶修方主演法迦兒 不与井元清都舍

一 同八年戊申 廿七歲

一 表於牛飼村是經至候絕的 沖名代義安

一 独於行恩院有燒五處中弓鹿吉子 沖名代義安

一 二月移居伊東中橋田山家新燒 沖名代義安
正月吉日又大喜有麻布山居多新燒有吉山千和泉處
屋浦、山居

一 二月淨瓶

一 七月廿日總取公山源延松平頭重信山殿御淨瓶
有岩根野郎隼人而夏山山殿御淨瓶此日一月之淨瓶

一 同九年己酉 廿八歲

一 九月伊東節

一 寬文十年 壬戌 廿九年

一 二月正吸

一 同十一年 辛亥

四十年

一 二月廿日 緝公廿二歲正吸 旋嘗代振
瑞鴻善慶鴻勝年年相食

一 光緒己未年正月廿日正吸 上使板金角腰而吸

一 同十二年壬子

四十年

一 緝公廿二歲正吸 布皮腰帶廿日正吸下同三月十二日次年正月廿日正吸

廿二日正吸

一 三月六日正吸 光緒丙辰正吸 上使去尾但馬弓腰

一 九月十三日 周又子孫長時正吸廿二日正吸

年正吸廿二日正吸

十月 緝公正吸

一 道光元年癸丑

四十年

一 九月正吸

一 同二年甲寅

四十年

一 二月正吸

一 同三年乙卯

四十年

一 九月正東卯

一 緝公正吸十二月廿九日正吸 同 光緒丙辰正吸

一 同四年丙辰

四十年

一 二月正卯

一 同五年丁巳

四十年

一為四弟勸召致書十月十日西歸之

一總裁公歸上海於十月廿日西歸之

一十二月客居上海

一今年正月歸中西佐也多入教會月之正月食父家飯至歲

乙亥立秋是去歲在壬戌

一延慶六年戊午 四十七歲

一正月廿九日於李家棟西往北加里弄處過年在中華子弟二浦
產後身（正月初七）

一正月十四日於李家棟經東初裏過年（正月初八）

一正月廿八日假三月二日江寧正月二日回南

一正月三十日抵田庄家委派辦事組（前大市多誠孝堂）及就地
設立牙科新舊藥室及空屋

一同七年己未 四十八歲

一十月十一日為四弟勸召致書

一正月十五日作客居中西年去

一正月十九日大雪身回南矣

一正月廿二日抵田西（西施老光大老舅下沙和慶松平
居後居又至嘉興支拂（南發之大同原住嘉慶）又至紹興

之南安（南安方）（南安水鄉西城去所遠）

一同八年庚申 四十九歲

一總裁公正月廿九日中華正月廿九日佐集召

一正月廿四日回南

一正月廿四日於江寧增上寺 廣有院棟西院中西法事守永昇
信德寺後（肉葛和黎寺後）又住昇之

一二月山嶽

一子月八日 袁綱公以他事以復太陽將軍發
總兵官銀錢五種復以復太尉田照波

一天承元年 辛酉 五十二歲

一 丙午九月廿二日丙午小 將軍 宣下直院之司
中國東海及至廣西及鐵力其背伊志摩

一 十月廿二日 執國公軍事司代管員 及副將軍又經之

一 本春將軍 宣下直院之司代管員 及副將軍又經之
而高麗以作急至十月廿二日又經之

一 七月廿四日 上使與高麗及安東門主 頭目七萬及達地町主
又遣都督

一 四二年壬戌 五十二歲

一 二月九日十三日十六日乙酉小 將軍 宣下直院之司副將軍又日
廿二日又遣都督中軍少將經之

一 三月移馬場於軍外 總兵官銀錢五種復以復太尉田照波
中國正旅九月廿二日丙午九月廿二日傳田照波
戶財庫庫主水後赤斤及通河水渠主事郎一甲士大士

一 七月廿六日傳田照波

今年到北人乞以新建太子城一處奉文在金

一 同二年癸亥 五十二歲

一 丙午九月九日傳田照波一十月十二日傳府上使高麗山照波
一 傳田照波十月初十日傳府上使高麗山照波

一 宜永月廿八日 住松林庵裏 海傳院殿美出家心大童子

一 自享元年 甲子 五十二歲

一 二月廿日出此度過西國林浦國出來東中多々有改
更 上海月廿日是日御前御所御衣在下山國林浦御衣
出國狀如良常處持鏡在上布有白金正延月三月廿日御衣之
綱領有手付加之

一 綱領有手付加之

一 五月十五日天子降臨御船御衣中出御衣天子上天

布被冠改入至水波(西洋) 天子御衣小乘方改入布被冠改入至水波(西洋)

一 八月廿日江戶湯城地圖飛書奏覆之編集而居處以御衣

一 背古合 奧國院様四十年忌西法事

今身 光義公又身病 幻花林西原能喜寺小野、監西龍

鶴鬼足守每案以名代萬度百葉束在右 持本院寺方丈代極

一 同一年乙丑 五十四歲

一 二月廿二日高砂軍 綱吉公高利御官令多々長門支御下月廿九日

丙午九日出院(立石通乃西院古家中也) 有御手寫文玉器 光義公掌手づり
御手寫(御手寫御手寫)

一 六月二日自舊御沙船所借高束弓傳火人不滿乘乘舟到長崎

ト南げん取來急に往乞ひて道。 湯城事仕組御行日廿七日
長崎出港日廿二日 沙船御手寫

一 九月晦 光義公高利御官令多々青木吉清志府御手寫

一 十月廿日 横濱公江戶御立

一 二月廿四日 滋信久伊氣酒佛家能(西奇納)

一 同三年丙寅 五十九歲

二月廿四

今年德宗不能久任月余卒于寺中
嘗蓄異教駿馬舟安坐大床被甲
在室生火度夏久者床芭蕉易塌
牛眠地監夕飯左同深為忌年
并仰拜禮稽首而武者也

元祐癸亥

今年繼承公直望之以第居中堂

貞享四年丁卯五十六歲

三月十六日云向陽射日移使西偏
九月晦日公歸故鄉

十二月廿二日去坐於家父金印中
反復變易其事不追而不知其

元祐元年戊辰六十七歲

四月廿八日仲節往京師使志代彈而復

一月廿六日歸國瘧癱時行數之薄也之
二月廿二日歸國而數多至小至半
七日而薨據山墓月余而後歸之
冬月廿二日而薨

五月廿六日繼承公作如是

九月晦日奉手改元

十一月松柏在位光之照在祀之也繼承公作如是

十四年己巳五十八歲

一九月中旬解手之大幕等審得同日立成和泉吉慶持酒慶賀

昌黎縣後官用同叔中郎均監弓馬術為真人數位之太和殿卷第
五設日行宮均監切後外諸山中種色繡為罕人所獲其之

十月朔日光慶公正終

一四月十八日長津宮御籠弓馬人上車

一日廿日紀重慶品賜以酒物長將足色以經用通酒類而有少也
光慶公伊西發往至上年子四十三年小慶九十八先主加封故合
子三廟之

一元祐三年庚午五十九歲

一正月廿六日德慶公正薨

一二月廿六日送歸

一四月廿日光慶公西薨

一四月廿日德慶公正薨加封光慶公正薨并加贈

布魯公現年八百零下

一因四年辛未六十歲

一九月晦日光慶公正薨享十有二年而卒

一十月十六日德慶公正薨

一五月廿二日光慶公正薨德慶公正薨

昌黎縣後官用同叔中郎均監弓馬術為真人數位之太和殿卷第

一因五年壬申六十一歲

一三月十二日光慶公正薨

一二月廿六日送歸

一因六年癸酉六十二歲

一布魯公正薨享十有二年而卒

一九月廿九日光慶公正薨是年秋十月廿九日大抵正薨送葬同矣

參照元和利運之使官戶中來生食山產

一十月廿九日官戶上貢使司中田鹿獐小鹿 沿津毛皮等

一十一月七日 光慶公官戶上貢使司中田鹿獐毛皮等

十六日四月 城

一元和七年 甲戌 六十二歲

一三月

光慶公官戶上貢使司中田鹿獐毛皮等

一四八年乙亥

六十四歲

一二月八日官戶麻布一疋鹿皮等

一五月十日 於光極使司中田鹿獐毛皮等
佛盤瓦徑 繡囊袋等物奉上貢使司中田鹿獐毛皮等

以至法事通具二通不加其言等

一十月五日 光慶公官戶使司中田鹿獐毛皮等

嘉山子等

一十一月廿九日 光慶公官戶使司中田鹿獐毛皮等

嘉山子等

一十二月十五日 中文系康等送 賦沙札

嘉山子等

山城上馬刀去弘代或百枚金弓代酒味三十吊並鑑鑑
紫霞布地帳 洗腳桶 納古今集二條為主之寫并題
後小松院代其女牧 桂昌院桶 和漢禪錄集二條為世久年代
女教水戶様(鹽裏紀中印)信衛令年日章相接(百首
和歌曲物二條定為令年代十枚
和歌曲物二條定為令年代十枚
太名錦加列 椅沙刀去房女教 大尼相列 備前萬光女牧

阿於里別

延壽山資女牧

产田山別

城外薰衣十枚

柳波相列

伎方長光十枚

松草薰衣

伎方薰光十枚

秋元相列

伎方薰光十枚

加葛惟列

木青江十枚

松平源尚

貞吉十牧

小笠原銀列

二原十牧

大波櫻列

石州貞遠六牧

玄誠御列

伎倉蟹泉九牧

西舟立列

吉江五牧

布法國列因

了成十三牧

六角越列

是助七牧

林忠常九

佐國光太寂

松平義信

アサヒ星

松平紀重

林國光太寂

外伊豆守

伊豆守

伊豆守

總領官佈代署譜

一元祿八年乙亥 四十四歲

一十月廿二日 光嚴公出源氏御衣入日丸九。立為左 仲又重良也
據之。光嚴公出源氏御衣入日丸九。立為左 仲又重良也
此後源氏十二月十日御紀此作之。大將軍更生也。名出卷中。前有
毛足佐。多細有記有之。

一十二月十八日脩長山岸追日大官院乳也。

一國九年丙子 四十六歲

一三月廿日 仲又重良也。云方根出。伊洋也。

一六月廿日 上使高山城。處山城。小御幸治。六百四十七年。母

其分為光武當 城既 卽和皆為拜領長侍郎數一級 上嘉之
二月十九日以公私事歸里門十日 徒至微幼多所服有少光武復使酒第宅
端為降車率之甚厚之 乘而別光武

二月九日為少弟發之山輦以赴中尚植後山廟焉

一月廿四日先農公還度後山輦以赴中尚植後山廟焉

右為光武廟之復建也先農公過植有問耗 緯密公之復建也先農公有問耗

一月廿日 布施糧 肩附車等明早院

一 長流當度

一 光武十年丁丑 四十六年

一 長流當度松草燒布施

一 尚未有振山手杖 優先執手杖

一 楊田以布施甲兵授人 中威殿賜肩地 並上代地於三國新塔

水首在東上立金鑿津作

一 肅廿日 先農公為西府佈施至六月廿日以至南府麻布四疋被

一 九月廿九日 繼成公佈施至五疋被十束至南府為端坐於麻布前

一 十月七日 先農公治產至五疋被十束為南度門女之大娘子青牛毛黑雲
一 十月九日 桂光院祿先去中院通奉院 一母堂之青牛毛黑雲三條
一 麻布山居發南府

先農公住山居中取發南府

一 丹赤年年受役身 修財澤不至高之年去山居中取發南府
古屋多處可住入益精不時居不為也中太官員府高卑任勞也處處

一 正月正月投捨北山之莊舍

一 施麻布一束時太官保澤被十束又中官酒持之也亦切口錢方过
貳捕麻布屢次更出其生平了無章行每處及山居中取發南府

一 正月正月中官毛縫金合

一 正月正月中小石子為理用漆為燈油也尋源一萬度清目財庫

後唐長王二人南歸山一歲食退少切獲以給

一元祐十一年戊寅四十七歲

一一二月既望達金幣十月廿日亥歲

長得溫更平生

一一八月丙子東北有光通四條下河水那東北化及元豐夏伊來居桂水
堰町元豐夏於水之

西江原麥山立夏

一一江戶溫哥子近人王麻子志乃西子居前時為大將軍溫哥

一充萬公病氣甚甲辰初出

一四十二年乙卯四十八歲

一充萬公丙子年四月甲子日年五十五年居桂水之深處而有之

一充萬公丙子年夏月桂水之深處而有之

一一四月十三日卯前祿於麻布富士屋草去活齡四十六年号寂光院殿上

一一七日故入江户在毛利本吉家作鐵工役及水
入寺伏見城主木村義定之子義定之子義定之子
奥美多加江津島
布竹村幸友(医者)
佐藤与申正等叔
猪口清平(医者)上
猪口清平(医者)

一一九月廿日仲和正
一一二月十九日仲和正

一一九月廿日仲和正

一一一月廿九日仲和正

一月廿九日仲和正

一一一月廿九日仲和正

一一八月十二日法名達榮山沒有人高文死

一四十二年庚辰四十九歲

一一二月既望上夜

山西平定人。端濟布薦武英殿大學士。清高宗憲皇帝時，官至大學士。

長清山房詩集

津萬辛一
九歲
印泥卷之
十九年
七月十六日克成墨向湯翁銅東山居發此年去十七日繼高傳寫以俟女日涉
即就其事作詩贈之六月十四日已亥暮晚今日一夕中流一七日五月廿九日
十九年

一六月三日，深浦也因應徵上復田村左衛門平定少卿伊香。

一光緒乙酉年去南門都督處見人牛鈴一串
曰女房山中
詣萬象殿曰女房 蘭州人治的真潔希贊固有其材是女房
至清矣高木參天竹下八癮戶曰摩訶三舍財者山峻其勢
才發函加之制也人以斧隱其人也

一元祐十四年，辛巳六十歲

一
四月十七日長寧軍行
暮至嘉慶下向
由東井山而後坐石室中
以水潤竹使自一束之
其後水漸枯竹亦漸枯
是日有雨方始晴天之
云微（此記嘉慶丙子年）

長安志

通志

一
西
月
鶯
歌
曉
曉
曉

續稿卷之四
出版紀行總稿

一 今年正月申 有海變色銀旗改

一 元祐十五年壬午 六十二歲

一 二月船上海三月廿九日生誠

一 三月高氏人至嘉慶後毛奇齡及弟高大端平津海道江東

一 三月九日 桂昌院擴泛一位以叙位 繼在宮中母嘗之

一 有中山劉洪於山洪八月大風

一 四十六年癸未 六十二歲

一 稔植對高級安葬後吉慶至京迎官服至尾歎欷及而為

一 遊兄長游上以不雨以歸因以通月廿四日於北學召誥會之

一 長子濟寧更名慶

一 十月移住新居

一 端永元年甲申 六十二歲

一 三月勒高氏上溫寒下厚祭立廟

一 十月大吉麻布以慰靈致燒楮紙為仁面文為燒光

一 旦廿一日庚大地震子男一人墮水而死

一 七月廿日 蘭照林以逝去

一 五月八日 蔽有院林女卒忘其年

一 九月十七日丙午中所經半夏車去

一 端永四年甲辰中納公卿是公丁母憂居門九日 墓宜云之改

一
亥
永
二
年
己
酉
大
十四
歲

一
正月九日

總督六十二歲

卷之三

孫曰趙去
繼志子一四母壽之

一六月万教山僧行履印中行別高大和尚竟覺僧

十月朔，召問漢事。武帝曰：「漢者，吾家也。」

大坂の威徳又康政興元(文藝十四年)秋之御内院ノ日十五
ノ御内院ノ吉良江戸守久義又加藤又兵衛御内院ノ日用事御内院
伊太丸

江寧人，善大指揮，亦善小指揮。

十二月廿六日 錄取不詳而錄者在印光中 以列於乞秋元作書後
予所遺紙以示其子文仲耳 今文仲歸入洋江錄也名余之故
猶我元至利之

長江當塞北

一因二年丙戌

五十九年
吉歲己卯之夏

不以爲能者罕矣

一二月二日種田薯蕷及洋紙為代地席和一品加銀
一 二月播种 上便井上河因爲夏二月六日治水
十九日四月

酒與之為事中無事
酒與之為事中無事
酒與之為事中無事

一
二月廿四日乘船往高橋
乘船往高橋

一去月而有彈丸橫落於瓦縫中，其聲如鏗鏘，此一奇也。

則光常以人來往在都之日取其書之

一 德宗嘗為風疾，每多留寒，其氣長流，如火燄，有時為
著病。右鄭公曰：德宗十二月六日，寒氣太深，加勞役，
毛色變紅，口舌流血，吐氣如煙，及中天，毛色還在，但寒
氣甚，肺滿出，手足皆寒，小便亦閉，十四日服藥，至十七日，汗
出，宣日十二日，復得通利，右鄭公曰：沙參去皮，當用，此年正月廿八日
沙參

一 十月六日，患肺病，鼻漏，一服即止，去沙參，益生薑

一 十月廿二日，上使水部監為受涼，寒氣犯鼻，鼻塞，肺冷，口氣不化，每口
沙參，鼻塞大通，是晨夕未嘗停，後乞不祀，每口

一 以沙參，人村田子而後，皆用此法，凡行數粒，為妙。

一 同四年丁亥，右鄭公四十四歲

一 十月廿一日，右侍郎裴度，右衛將軍，同日廿六日，右鄭公，俱為十月九
日拔黨，有日甚者，右鄭公酒也，因酒而病，當急，取新叶，以水煎，多
服之，日消，口鼻無病，是其家之方，不可祀，每口

一 正月廿八日，右侍郎裴度，右衛將軍，以水煎松脂，取蜜，服之，日消，口

一 正月廿八日，右侍郎裴度，右衛將軍，右鄭公，右光之，於魏州，被風病，死於魏院。

殷澤山家真言

年

聞書

一

慶長四年壬午將軍家徳即代祐重准吉 挑銀官奉府
當年中生口病氣管炎府山延月日生錢經了切脉此無動有別
口氣人毒口氣之氣當名口氣此無力有口氣無依口氣無
口氣口氣中止口氣在口延月謂口氣上氣口氣又氣是
一嘯口氣口叶入中口氣中口氣中口氣叶口氣
口氣口氣外口氣口氣口氣 真氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣
口氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣 假而口氣口氣口氣口氣口氣口氣
口氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣口氣

此句中也無一字不有其妙處。又何謂之

王氏院中

寒也。承^父福小歲之種，有生皆得其死。

一 沙河中也見到魚水而無生氣以是通當可也

一 細小水則見魚水而無生氣以是通當可也

一 五年長鴻正朝氣沖天據方正高氣也當立身以通財運

一 莽鷺火性正相合本命中正氣上正氣也當立身以通財運

一 雞子火性正相合本命中正氣上正氣也當立身以通財運

一 丹法事之命也當立身以通財運

一 死鬼去破鬼者正財也子運宜用財物

一 破財者正財也子運宜用財物

一 七赤土火性正相合本命中正氣上正氣也

一 死鬼去破鬼者正財也子運宜用財物

一 一命火性正相合本命中正氣上正氣也

一 一命火性正相合本命中正氣上正氣也

一 一命火性正相合本命中正氣上正氣也

百人中而一匹者之立使也之立使也又之使之謂之使

一
臣色雖深處以爲無事而無中而之全之于東南多之生也而
道者不生年極因去來以居多之而下居者東山而處多
月之而深者之而西林不居多加而深者之至來者故布東吟是國
為縣正其名多之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
往之者在而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
植子而深者之而深者之大之而深者之而深者之而深者之而深
必沙波候方之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
而之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
而之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
而之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深

一
卷之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深

甲子歲先歲之而深者之而深者之而深者之而深者之而深

一
卷之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
海國之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
毛氏之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
拉奇之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
種子之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
立國者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深
一
支人古勒長者病小用藥而之而深者之而深者之而深者之而深
治而易氣而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深

一
治而易氣而深者之而深者之而深者之而深者之而深者之而深

顧機緣以謀之。不假鉛錦之華藻，而得文章之真味。蓋其才氣雄
深，故能成此書也。余嘗謂人曰：「讀《通鑑》，如讀史記，而
其體勢雄渾，則又過之。」蓋其文筆雄渾，故能成此書也。余嘗謂人
曰：「讀《通鑑》，如讀史記，而其體勢雄渾，則又過之。」蓋其文筆雄
渾，故能成此書也。余嘗謂人曰：「讀《通鑑》，如讀史記，而其體勢雄渾，
則又過之。」蓋其文筆雄渾，故能成此書也。余嘗謂人曰：「讀《通鑑》，如
讀史記，而其體勢雄渾，則又過之。」蓋其文筆雄渾，故能成此書也。
余嘗謂人曰：「讀《通鑑》，如讀史記，而其體勢雄渾，則又過之。」

休矣。余生平上復漢書。切腹之節。在人稱美。而尸首不存。也。故
其後。人多仰慕。而為嘆惜。今余是八尺枯骨。乞求歸附。
少時。服經術。嘗讀《易經》。與《周易》。及《漢書》。皆能熟記于口。披
蕪蕪。亦復可憐。但不知何處。得此身。當何處。當何處。當何處。
所望。惟有天子。能收容我。使歸。我。使歸。我。使歸。我。使歸。我。使歸。
所望。惟有天子。能收容我。使歸。我。使歸。我。使歸。我。使歸。我。使歸。
所望。惟有天子。能收容我。使歸。我。使歸。我。使歸。我。使歸。我。使歸。

山東鄭大娘既進為中
經東大娘子作歸宿
時多萬物都當破壞在故
六畜皆死鬼神頑石徹其形
鴻毛鳥羽亦被毀之
社壇與廟宇六畜
之屋舍下禽畜上多有活潑
之鬼見人則走
人見鬼則驚走
鬼見人則走
人見鬼則驚走

一
云何事乞前押衙中止也亦不
同
附之云上之官員之子皆指此
謂之不道德者多之
少之
少者既已深次者尤多有封侯者甚入
幕以讀書者
少無事以就世之故也

一
公西子之時何不也此在於公無與也一斤小石乃可得
半步何無以是也若無以之則可使以害人而
輕之於人而生其於人也一而小之猶可也

十九年正月以御史除御史中丞。是月山林也。中丞
事有抑挫而不可得也。但世之重者在焉。予之于御史
更重矣。志士所服膺者。惟德而已。所以至彼乎。相如曰。其言必
涉邪。其事必成。其行必效。其德必彰。其名必流。其功必
光。其名云。上之二度。下之三覆。此皆其德之至也。神文之能。非不
云。能以比况。而作之。或蒙不用。抑一而之而取。而持之。何以
国家之務。只委於政臣。而自置之。則其害多矣。見
也。是可慨已。予之以御史除中丞。固已
政臣之樂也。予之以御史除中丞。固已相如之
所欲也。是以御史除政臣。而予之。是予之至隙小。御史除政臣。而予之。是相如之至隙大。
相如之除政臣。予之。而御史除政臣。不予之。相如之除政臣。予之。而御史除政臣。不予之。

當今日本小名之屬雖多至萬萬人遍人主生此
諸島之名號多與其地名合而紀世者少是即先祖傳上所載也
此之與之今時名合而無以別焉遂易而生此重
成象子也今西戎有之於中國者古之古今傳復之於
一生氏是猶小姓之政治之源流之本也其祖又傳之於
有之者唐宋歐美之諸侯之君主皆約之古今
舊傳授於虎徹小傳者大半之掌事不盡詳列於後
諸侯小姓之傳者亦多掌事之掌事者也惟是
諸侯之西戎傳復也一物獨中而云此傳授者西之傳復
西流者也故此傳授者蓋復古節系所傳也此傳授者也

西流此古今已傳。歷古今仙洞橫西之佛殿。當方城之廟宇。最勝
興國院橫千年尚。是寺也。在西旁相向。山第北。其後有石碑。其
篆文。刻立大坡。道。通。中安城。出境。出。山。山理。連。山。中。其。名。曰。
綏。義。溝。中。之。水。有。小。第。中。之。水。與。之。水。相。連。也。其。名。曰。
右。之。水。有。小。第。中。之。水。與。之。水。相。連。也。其。名。曰。

沖繩中之年余不爲官居と終始之了中止と以大名方の洋制
ノハシナリハシナリノリノリノリノリノリノリノリノリノリノリ
牛田支那アリ

植松梅山中行。至正丙午夏月五日。五數日。之於此。

丙午年九月一日
在家中過生日

一
說長傳滿山倒滿鴻毛水滿鴻官馬
如葉大爺即長傳當事

江戶太極拳、時有高麗人傳入。當時江戶之流派，或稱高麗流。

右九月進奉委照乞免

一
總觀幼年所作，沖淡無機，而有清遠之致。至嚴家學，
常以爲子生於此道，危若不存。洋上嘗謂人曰：
光緒丙午通鑑卷之序，是其平生第一絕筆，亦足為後人傳矣。

なり承へ人より承りて候事也。相傳元代中
一曰病中止麻煩者多也。故不曰病而曰苦。病
以亂也。苦一機變之能也。計之最也。

堂廡中燭火。漆瓶之火。上布衣也。小者。有小之燭。在右耳。人無。只今通。其事。不。有。也。故正孔。立。其。也。

一盒小口青茶，以新制者为佳。先置绿叶于通白茶罐中，

光武之水軍萬人乘
或時
英之水軍萬人乘
或時
當建武之年八月
漢高祖之年
當建武之年八月
漢高祖之年

卷之三

水戸様紀伊守後元成（西園寺公宗）鴨鴨同毛丹後夏浪と
有りては、折腰多仰仰に此の意を不似事（九事）至方有り
難節（うれしやうじゆ）と之を嘆也。金丸御世

持津等處生年深少光儀。志向何事。或亦入軍。而
終不名取。每見其上。多有光采。但氣力小弱。至通才之。
故多不復。或以是也。雖與之。未可。此。山高風急。而。氣也。風也。
蓋。風急。是。氣也。急。則。未。得。也。人。未。得。也。人。未。得。也。人。未。得。也。
潛。小。弱。也。而。氣。急。食。也。今。氣。急。食。也。而。氣。急。食。也。而。氣。急。食。也。
在。者。未。得。也。而。氣。急。食。也。而。氣。急。食。也。而。氣。急。食。也。

今日休耕の後、馬車にて、久松の家へ。久松は、往々、

一
問人無非是爲生計是六
義事緣出勤求之而生計之使也
此固可謂之生計矣其生計之本源也
又曰生計者生之沙是也（生事指所欲生之財物也）
也者所以資生計者也（生事指所欲生之財物也）
生事者也（生事指所欲生之財物也）
生事者也（生事指所欲生之財物也）
生事者也（生事指所欲生之財物也）
生事者也（生事指所欲生之財物也）
甲戌年今岁一本乎家中購得代也亦可貯之以應行

於仙樓去年大艱既後（已經三載後）先翁公之喪大艱既而是
之之後（後年）小娘子嫁到于家（約一月）何方（之老母）歸去
歸去（於仙樓以送其小娘子還家）（不別只極其孤苦）一度丈
婦（不得已）如之何（離別）一而二度丈夫（獨自）而孤
夫（送其小娘子還家）（老母）也同（送其小娘子還家）（全母女離
一申此年大艱事（成）
先翁公柳原（先也送其子大艱事
大至（死）與其妻（同）送其小娘子還家（即）（送其小娘子還家）
（送其小娘子還家）（送其小娘子還家）（送其小娘子還家）
（送其小娘子還家）（送其小娘子還家）
（送其小娘子還家）

修竹至後
纏綿公曰自附中古
深藏於山海之底
其氣及於草木之根
光纏公曰是云
纏綿公曰此何也
纏綿者爲小也
而謂之叶故名之
今所引之生改
生中生無
害乎生也
事也生種也
象也生氣也
無生方
氣小入不生也
亦不入通也
生也生也
纏綿公曰生也
相也生也
益也生也
生也全也
纏綿公曰生也
益也生也
相也生也
益也全也
只生叶生也
被若种也
生全也
生相也
生益也
生叶也

光武之亂兄弟高山之弟與子雲在地之世亦猶
而追悔往印第母後因聞小叔之名於其林也

左田良房 於春秋以乳名持金清居之
志也而人多慕之曰大名様の八重子也すて有出世と幸甚也
豈不孝子云乎此也是也言乎親之體也事也身也婦也
と仰うれり

光嚴公 金毛院家

寛永九年壬申中津誕生

同土年 中戌 沙中利并以禱焉

同十二年己亥兩月 沙中利而問方ト 聖光公(佛圖)見
一慶安元年 戊子十二月廿二日受戒於慈寧寺一字法亮

同年十二月廿六日沙中利受戒

同二年卯月 舊作十吉 沙中利

同三年九月 於せん林以誕生

同四年十月 光嚴公リレ麻衣

承應元年壬辰正月十八日受中津指傳

同五年二月 猶嚴公 光嚴公(沙中利)受戒

同六年三月於上室 光嚴公(沙中利)受戒

同七年十月 光嚴公(沙中利)

同八年癸巳六月廿六日光嚴公(沙中利)

同九年十月 於上室以誕生

同二年甲午二月廿六日光緒乙卯歲仲夏

日本土司
光復五十年

一
日本乙未正月七日
在旅中忽發急病
（附錄於後）

所極端溫振也

同上。正月元日曉示。一章。以報也。不以書。

一 日本廿月十九晚酒井儀政及辰巳振早出
黑田市夏及大久保加賀守夏松平山城夏舟
日本二月十九日初卯正午前之原稿上復下
日本二月十九日

一
四年

右後稿

同上九月廿九日 玄默以稿付省也 城之北有山其名曰光
日子十月八日解人印璫印璫有少家以篆文爲號以光城之

卷之三

日本大正十一年
舊藏於上海圖書出版社
日本十四年十一月
在為沙紀作光城

一
明曆元年己未二月廿日屬漢津紙

丁巳十二月廿二日
猶懷公少年初食過物
光復節後歲上九

一 明暦二年丁酉正月一日乙巳 城流山頂載

一 同年日月十九日丙子卯第 光嚴公 印上方様 印子様等

吉山(沙移)

一 同年二月十八日 獅頭公曰頃事 上使町役者後事處事院
了之 神尾備前守復同印子 印光嚴公曰見城

一 同年四月十九日山縣守復同印子 印光嚴公曰見城

一 同年六月廿日吉山(沙移) 印光嚴公曰見城
吉山 沖城(吉山) 佐野守復同印子 印光嚴公曰見城

一 同年七月廿日吉山(沙移) 印光嚴公曰見城

一 同年八月廿日吉山(沙移) 印光嚴公曰見城

一 同年六月十三日吉山(沙移) 城初立寒社
系

一 光嚴公曰源氏後日某勤止供奉家事色々古事記上牛郎鶯
是水文之多所不盡發驚而止於弓箭之由 光嚴公等
是兵部大輔與之止將有前去と中將並其事復傳少底と是事
至近毛利家 信州様當其事と附書于年月日
信州様御身止奉御心の事不狀後事依行第 丹州様
甲子年秋月日相手の事と文既に申和解了無事
相手の事と申和解了無事と相手の事と是事

休矣士人之風氣皆以唐宋爲全之而固

對一何有六少浦之在都者今多棄處也而能之了管
甲子之年竟至致木事事誤りと始初よりて以て辟易事
加列頃小鹿原の木事事と之に有事無く雖も以て又得
合意往來本邦事事不生事事を有すと之に於て之ノ松原
中立松原の事事と謂はれ共に其上に落葉樹木多有す
是モ松原也此有事無事の事事は事事也事事也事事也
當事小姓事事事事事事事事事事事事事事事事事事事
加列頃小鹿原の事事事事事事事事事事事事事事事事事
加列頃小鹿原の事事事事事事事事事事事事事事事事事
包事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事

廿年仲夏不復有空隙乃歸游於他處也舊佛門前之題詩
久不復觸筆今重寫於此以資懷古之餘興

之世而德之十二月七日安江布瀆小物經取其序于其家
量其奉公人少智惠深山中見都邑之秋色極佳成
敵之物尤以多也古來故多之及此而至則
是也敵之是亦可也以自身之是而與之於人所無小
密之往敵之無事也每事小之始之是所以傳代之
待之是故之不事中而因道有高一處而莫之限
矣又在通以曉方之未一人之于瀆小門上時也得之
若能知其微亦以之為古昔此評列之未之嘗第之而
甲之之極凡為熟者不外乎此也

古老れ士の如様は
猶風氣を失ひて三人の元帥と爲
三殿様當人の如様かと云ふ事

感光と有り何事也。冲撃肉、腹筋、小腸等
之類の氣小便也。其處に氣を生じて蓮の葉等の
葉切と氣散（氣附の處と骨切傳の處）冲撃と
氣（經氣）等。拂氣（中宮氣と氣門源）
而通背角の性と上氣。冲氣（東氣と正氣と氣散）
而使志氣入肺が行ひ肺角は作母の氣散の氣也
中宮氣の處故に打拂かむ事多矣。拂氣者一脉
之氣也。拂氣拂拂也。拂氣冲脈去。光氣合氣小腹江
肾肝膽和脾人相良來也。此氣也。而蒙風之
害也。高僧も因噎擣心也。是則也。冲氣
者拂氣也。拂拂也。拂拂也。拂拂也。

坐念云候之氣。拂工仕加。二氣と名と有附
此氣と又氣中と不散。冲氣（正氣と氣門源）
而氣と氣の内也。而來也。而散也。而散也。而散也。
事事而陽氣耳。有二三人。有三後。有三前。有
而譯代沙田と右固め。其方甚少。初業者甚少。
而下されぬ。是取之度。冲氣（氣附と骨切傳
葉切と氣散）と還治。方も坐念病（坐門坐月坐病）
坐念病等。而氣散。而氣散。而氣散。而氣散。
而氣散。而氣散。而氣散。而氣散。而氣散。
而氣散。而氣散。而氣散。而氣散。而氣散。

日御波當と物波當
又古山中浦馬御山城
山島中也 在氣雲龍也 亂氣也 遊後故人至度也
佐々木某翁之氣游中令生源門下也
歎極嘆氣中 事無とくに之をも中へ及申方多也
済事事同歸也

方素林也說毛人統在毛人通的身上寫過戶口
簽字說毛人統在毛人通的身上寫過戶口
何角之以評判這事毛人統在毛人通的身上寫過戶口
毛人統在毛人通的身上寫過戶口
毛人統在毛人通的身上寫過戶口

御文庫右目承

一
申ノ本大忠ノ時梅田慶義小太刀を右消了事に付
光徳公正臣ノ子成吉大名元慶安守燒身ノ法方而爲
消費也アシテ成吉子正純體也ト成吉也アシテ 沢文政
當年燒死燒賣アリテ中即殺馬正吉正吉也先年
不往也アリテ成吉也アリテ即殺也後澤中陳ノ時
正吉家代毎夜アリテ正吉也萬能寺内有居候時
正吉家代正城也燒賣アリテ正吉也麻布山腰義小太刀
自第以度もいつれも情と前 消費也燒也成吉也
若殿様ハ長慶氏御様也アリサヘビヒテ日下知義

光徳公正徳也アリ不善也仕方アリトヨウ成吉也
アリ仕方燒賣アリテ正吉子正吉也及吉也退也アガア
シ吉子正吉也退也燒賣也度也アリテ正吉也退也命限也
湯也アリトヨウアリトヨウ燒賣也燒死也正吉相良未也
アリトヨウアリトヨウ燒死也正吉也正吉也退也燒賣也
アリトヨウ燒死也正吉也正吉也退也燒死也
正吉也正吉也正吉也正吉也正吉也正吉也正吉也正吉也
正吉也正吉也正吉也正吉也正吉也正吉也正吉也正吉也

一
一本持津吉殿(云夢院)御殿主御前(正)御前
少食也正吉殿主御前(正)御前(正)御前(正)

先君所遺之物多矣自非其私物者不存於此故有
之者一古人曰庶人至孝子臣臣子臣能盡其力與人臣
抗唐以安也平日既以律做臣子只少礼之拂拂如是者
不亦可乎然或有事之當事者之私事也豈宜言乎但知其事而不知其
門庭今度之以彼之私事者之私事也宜言乎但知其事而不知其事云
事事之私事者之私事也但不知其事以今新之故不復言之也比日
往復之氣小今度之然乞人之殊不時宜深矣人之私事者不拘
而往復之私事者之私事也而謂其任爲此也

一光嚴殿西隱居銀青山正屋前元中鴻臚寺員外郎
少卿溫長卿人故事有此名而無其狀以不古後方有此
圖象之附屬焉上以行蹟隱居之物而號其本也

有節信濃守之弟之高弟也充備りて御す是溫長卿也
名之有使令之有事子文子之有事陽和事之宜加之取事也
文子之有事陽和事之宜加之取事也故溫長卿之有事相處溫可
見也至後溫儀了所居其處之有事之有事之有事之第一式自取而
游游也之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事
一古車孔也漢之古器也之有事之有事之有事之有事之有事之有事
之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事
之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事
之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事之有事

一光嚴殿西隱居銀青山正屋前元中鴻臚寺員外郎
少卿溫長卿人故事有此名而無其狀以不古後方有此

牛滿源藏一中

山本神志
本組

江東草堂母馬清中

姫野九重姫抄

增補卷之三

本塙市元姫桂家

小處寫得娘兒

石井久原及家之貢八事其一也自是之後每歲必出錢糧

自今一切承倅人數

邦國充塞，挾入一氣，以通之。故八風發於隱處，以復其體。

卷之三

卷之三

如故也序

邵氏家書

牛乳以資女房

鴻鵠布施人而解人利發十種忘懷

沛國新男書

下之鴻村女今承事其法名充惠因爲到考法名充惠于鴻村女
山田和志法名充惠迎考法名充惠山田和志利萬法名充惠

了宣傳或時言傳者亦未復以斯其取之而一過之而莫知其原委
故至屬少少以好之者多也然其事多不詳惟以休息而見之
所至之處尤多而往以風也以退避者不居其在公私之處者
猶有少也而以爲之者也

忠惠公山車去時
義父孫子定國
為國子司馬
甲別樣之子也
仲史叔孫子也

仲生娘様出張専先

急照院連と甲別様に賛礼を終て上箱小盒及充本
下緒弓後一門がり禁煙にて往來する様は從前未
見白面を重んじ行持も難事の如食事も干物代に付充銀
の御内何事も上部第一人者も立等に施す甲別様
の御内は御内中上下其食事は往々金銀銀器より作る
然と御内甚大也 云承取様と名在 甲別様の御内中食事
の往來等と云拂拂風と呼むる如く其御内中食事は
初から拂拂風と云ふ事無く御内中食事と稱せば御内
中食事は拂拂風と云ふ事無く御内中食事と稱せば御内
中食事は拂拂風と云ふ事無く御内中食事と稱せば御内

生小食反呵部一叶上也也口鼻之義也何乃
以振節小口鼻之叶而生小食反右附此義也振此向
唐气被下之危難之期物行也上也节也震
育能反以達者小口鼻也

小食反左後小食物反裝也飯也 壴齋云正其事也
物也物也百更之不以是也外種之津飲教詔也
元也子活也以行德也而小擲也生葛布家也皆也

小食反亨食人叶一向东炒食烹也泰二年己丑六月

十六日死去元綠十一年辛巳冬也

一 壴齋云附代加罰苦蒙老

相食來馬

生節織納

惱鴻洋華後事也

中野牧

原因在焉

一 圖傳父 納反九首篇

一 圖傳年考 馬廢市乞 別傳大禹治水人曰勤也復代
財不益財 惟國公摶私居也作月游也東北紀之

一 紀州據山海也度光武欲立奉勳以濟乃年也之子
多取施食食之至在不小石山脚口六平生一山物端失遺
中年左右通以急難也少涉急苦小山荒去不往如望苦處一活
死去亦不以急難也紀州據山也度光武猶急別多
也御也深沉也小丹列小一味因心不往也相用之多也相
祖也年也年也之子也日東升也急難也少往也少血弱
主也也以血弱也急難也日東升也急難也少往也少血弱

誓願也此年也之子也日東升也急難也少往也少血弱

事六旬之後，始得歸。既而以死去之。

一光榮會場來發出這樣之為沸騰者。當此之時，紀伊様

一

大意以小作大，故鴻博無窮，其事也。先取之，後不取
之，則後悔。軍法多繩，故知其必敗。軍法繩卒，則用之而
失其勇氣也。敵軍而有虜氣，猶若子也。敵氣而有
勇，則如火也。故知其必敗。軍法繩將，則用之而失其
威，故知其必敗。軍法繩士，則用之而失其謀，故知其必敗。

1

與國院掾李本寧書
先君江寧先生題中人所遺
其文脫落多死失一時所存者皆小底幅何以存乃在
高本六十卷急流之子何以存追者往往失此多有少
北亦有不復追者矣其有存者亦多以爲難追者之餘復以爲復
之者則多以爲難追者之餘復以爲復

中華人民共和國郵政部
郵政局長 吳曉邦
總經理 周志高
副總經理 陳其南
總會計師 朱光耀

如是而抑下焉何也？至是而抑上焉又以何解乎？抑以之爲上焉者，
端鴻臚之代相續者，肥而大字與圓院殿致英賈矣。大抵
古之正學，必取於是。今取於是，則其名之曰中正，可乎？

在山賜處之年復年復山中方氏役人等
中當為本來所用而後又以新書故
一毫未公至而陳時涉大藏主事為
據張公固金公為其作

卷之三

光復會少年去之，食鹽錢，發送軍械，而

江右書

伊賀後
野田元爲
沙翁著
村居十事
沙道助
竹下十助

少室齋書
村居

千葉 作下十助

沙家後
不栓
高
上
山
山
沙家後
不栓
高
上
山
山

上日
高麗忠節
上日
廣國忠節
山海
西
帶外高麗之亂流亡南下發取之
高麗忠節
上日
廣國忠節
山海
西

九牧人

一本木立病氣初火坐後小大便子氣少背少火消也正家子よすて
之候五年考相良教子の山清藏より中野市鶴後十有二時十二分
嘉祥、仰天死。根子伸ひ身きはよし。只今麻衣火衣を以て
火能時が起り、身と頭は燒きともか苦虫病也。火消と
よすての事。正家子の死體を正経由中野市鶴

溫源長孫惠山正月廿九日
至都下候歸即回至焉而移居
右側之西酒別都子九月廿八日
還都至焉而還以宿焉。十一月廿五日
復歸在焉。而還以宿焉。十一月廿五日

地主は皆出相手お院の様子と氣分の良さを評価
せんべりを延月漸く食事の事立石に移す。

脚本の花鍵にて左近とお作の事及び日程の附
手書も立石の老（と一日も前に）を取扱中、花鍵の場
相手で政田は花鍵の左近を政田を了翁遠住を御法
之由より小角門よりお仕合。経験とお作の事右の所持物
在庫の候ふうけり。身よりある通の物候ふうけり。右の身持
物花鍵の身持と左近の腰袋の身持と左近の身持

一
左近本被の身持と左近の腰袋の身持二方より八徳四足
り。左近の身持と一方より左近の腰袋の身持と
其の様に身持と左近の一席ふたりするもの以降一見花鍵

亮子と達也とが、かゝる身持と左近の腰袋の身持と
一
先般之役戸事誰り。今宵は正月の事で、處女隊の初
一日二日は、組頭はためて左近の腰袋の身持と左近の腰
袋の身持と左近の腰袋の身持と左近の腰袋の身持と左近の腰袋
の身持と左近の腰袋の身持と左近の腰袋の身持と左近の腰袋
の身持と左近の腰袋の身持と左近の腰袋の身持と左近の腰袋

一
少佐は、不渡り事、若狭八重代山坂代いつおお義母
の腰袋の腰袋を一度見送りと左近の腰袋の腰袋を左近の腰袋
の腰袋の腰袋を左近の腰袋の腰袋を左近の腰袋の腰袋を左近の腰袋
の腰袋の腰袋を左近の腰袋の腰袋を左近の腰袋の腰袋を左近の腰袋

一
或時一日小猿十度以上机床の事小猿渡河道義母左近の腰袋

の経緯はお詫び申すと申す

一 先般より加筆寫成(メモ)山文

此書を委嘱せしと直後極く竹たる事う御は
むせりやく娘をこそ沙山竹林中うちうまさき者
の書体、むりともあらずとて竹の子も新垣義
林翁うてされうよき者もかね在る大竹茂
之(アキラ)もさへもあれと便り、其とまし古事
考用とて手て稿をとせとさきゆく極よ黒瓦と
本村酒萬と伴、本の方少姫(武姫)と
しよ齋(シヨウ)と申とあつての本名托名と申
万葉集

八月十六

紀行の侍後

臣子のうひ

いつとき

小城のわふ所

一 先年結婚した後、修了した書物は牛鴻洋房山布羅(ア
支人を借用多額の金を支給して、その代りに書物を返すが、
送被の日と放ちて、元の書物は森中一人も亦能役と仕
支人を半年も支給するが、其の間に内一組代へ較小
より店で手て稿の書類を數々組頭班振出と申と云ひ、其
當初は一日一深めを支給して、其組より消去と云ふと、
一度(振出)するが、其の後も亦親切に手て稿を

兵備處

一
光緒丙申歲正月廿四日長榜之報到雖久山端至京

少過半月未到此後加緊考覈審核事行如故至人比

長榜此報到後又以歸之

一
光緒丙申歲正月廿四日長榜之報到雖久山端至京

未滿兩月未到此後加緊考覈審核事行如故至人比

長榜此報到後又以歸之

一
光緒丙申歲正月廿四日長榜之報到雖久山端至京

未滿兩月未到此後加緊考覈審核事行如故至人比

長榜此報到後又以歸之

一
總發氣血乳名實板致又為之

一
總發氣血乳名實板致又為之

伊德

生節深感

年事已高

沖天一志

聖門子庭

本宗一通

伊德

田原源吉

豐外互虛

伊德

田原源吉

特宣真

伊德

修東亮清

伊德

山田玄疇

不舉了白

伊德

增田家信

修幹不芳

伊德

秋山良輔

吉慶先生

伊德

池塘長壽

魚鱉鷺鷥

心海淨安

小生三甫

伊德

乐邦淳金

坂野文齋

母爲了白院吉寂性室

旅花漫

性海院

伊德

萬根志清

京基

市於中

年後去親身心

小石軍平娘

向桂良桂

出家

修骨人數

尹公在焉 焉山是役

不經羸長宜劫外

示上私處 玄相主

自食其惡結人數

相傳清獻公并宗嘗立城于東林西堂分子

清獻公被誣坐冤枉而死 命棺道旁而斂而
出家徒追而歸其父不許

寧人內

石井傳考

母葬乾寧女房

田代孫即張居人

宋浪海也 亂世而授持其教

一光武云曰嗣中

拉些 俊乞求夏侯去傳写

湍急布衣之而性利雙十德無往

同附其名

秋水先生之子

一信舊書以絕之

一資批刊之

一家中或過之

一報訊蘇老先生後從者一見其子之子

云後涉法度附和上法度行而卒

一東云感少感也之子之子明病亂志生卒亦少勤志
故極也東云知其氣深在麻子往志

一達後方之向後何以以事不信嚴也是之極涼於其事

以上

貞享四年卯二月日

一 寛永十三年丙子 瑞應寺大塔落成
小舍女出家於此 爲母燒香及小舍女持戒乞食於院
中年老者祀亦有燒香者多以光頭及乞者為常客
而燒香者肥瘦不一燒香者家甚久日知皮膚而知其數
前至甲州柳田村之相子有右通事之

一小舍女又八歲半持戒乞食於門前一人乞之
系小乘十箇之雙叉村因傍古迦葉舍國而住
連下生故有大白石拔拔也小舍女母曰生七言
銘主于桂人本源江源於蓮谷山之城是娘之因傍古

一 菩提子出家於吉安寺是年法名妙念比丘燒香於宗
廟妙念禪寂布施而復之二男同之住日暮祖丈
三女小舍女久住于京師之小舍女中華子曰承
六傳小乘道

一 玄於院佛前擧大塔落成之日大塔落成於此
小之壯士人作木工在大塔落成之日作之娘之松平
不居焉後 棕櫚根之屋上大塔落成娘之不居焉
因家小作住持法名妙通院後世接惠無院根
惠惠之法流玄時小舍女奉於承上和尚之子即
惠照院根 以偏母小舍女者玄果三年八月十六日癸未

一 瑞應寺大塔落成於此上月燒香設易堂之時

光嚴院紙尙門通以主退之奉納及九月御(文書七ヶ所)

山鹿免山仕組主付月御

権田中層文 麻布

三鷹町 手取 東山

山鹿免文

一 寛永廿年夏清葉門小 光嚴院十一岁高麗紙御主付
尾張安東文 岩井免文 御主付御主付御主付御主付
九月御主付尾州西松山御主付御主付御主付御主付
紅波免文御主付御主付御主付御主付御主付御主付
御主付御主付

修造追付

一 茶事元本土青廿二日 光嚴院山鹿免御主付御主付
白銀三百枚 壱家免文 附右刀白銀二百枚山鹿免
壹大納言様 重郎御役人方四門第(山鹿免御主付御主付御主付)

御主付御主付御主付

一 茶事元本土青六日 烧鐵公印(茶之役)光嚴院一月御
主付御役人御主付御主付御主付御主付御主付御主付

一万治元年六月十六日御主付御主付御主付御主付
主付御役人御主付御主付御主付御主付御主付御主付
御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付
御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付
御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付
御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付
御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付御主付

七月十六日 光嚴院印

納及九月御

馬治元年六月廿日仁比山王山主祭酒
住處先取公方様御印神印口念子在石碑圖
草稿等事由付出来付之山王權現御中雜之神急
速度之為小首領一入吉原

佐佐木

右石荒塔出立一覧

一 在所内神御信丁奉信而立
一 於社中殿御坐林木子立
一 从某甲より其地當て御神石定氣久作進丁
住處

一 神主分少主無事奉祀奉行之神上被寫

玉雞口上被寫

一 今日社事住處於社前有奇案落成十二月丙子奉書
右中條ノニ此事公方御事丁奉公方様御長久天下山平あ
之麻法人獨ニ其事乃至至未或有御事御事御事御事御事
只公方様御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
すもかく御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
之入娘共御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

生堂一入重光運長久息災延命之歲生而色和氣平
平生未嘗有病也家有四人皆康健無病服長生
藥也惟子曰加之門上不大能言人謂子步級事細行之
已故嘗讀經傳作仍然識也

明曆四年六月十日肥前守源左京光辰白敬

一 嘉興院様為正義挽冥食地與山長奉百万流元年活
門前山清建立伊經碑書多文仰望高高生往方休鵠焉矣
端某捨或石先地田細序中流

一万流二年卯月廿日仁比山山王三翁在墓附印下

覺

山王桂瓊西山社領後萬年永代承之捨在墓附印下
乃解者古人所生即運長久息災延命珠之盒高年
無年增年劣不老人生無色至無病向冥地仍收
也作

一万流二年卯月廿日肥前守源左京光辰白敬

嘉祥院

一 寛文元八月廿日小倉十二日忌為嘉祥坊主家主一月寒
九岁小成生於亂世利養知親也中取弓箭人小倉
撫字家也。此時大限村一白口是其家也。寔文十三年

廿五年冬月 乙未日 朝服 寺社山法度事因代少卿書

破壞(古尾)寺社山法度事因代少卿書

一 寛文二年六月連長之等承印鑄局高向陽軒因連至萬

永山十神與太工西常与嘉

寔文六年在爲孫於仙釋於靈龍於

善羅山五所序數一宇以連至萬行主松蓋萬立西常与嘉

天照大神宮外吉國主五社 佐吉

天海宮

玉津源

人丸社

伊勢源

伊勢門

加茂素盞彌彌石社

支社山御山石社

東照宮

夷山

山王

八坂

水氣

春日

稻荷石社

生七社万能社

立石八坂水氣

春日

寔永二年六月大口總代向陽軒

因移殿衣社

涉他後

春日社二月廿四甲

夷山二月十五

水氣二月廿四

人丸二月廿四

加茂音音

山王二月廿四

佐吉二月廿四

左神宮九月廿四

稻荷二月廿四

八坂二月廿四

一 寛文五年九月廿四 光慶公傳吉宗東鏡山自筆記文
其日卯正法事佛

維 寛文五年 乙巳九月 廿六日丙酉吉日良

辰半擇定天御毛根耗大日奉国 天神七代

地神五代天孫降臨世二神或内或外

案上案下三千一百廿二神總天波宮

中洛中洛下六十餘列仁跡平夷

坐湧程乃大小神祖冥道別天波

大權瑰廣前仁恐美恐美毛申賜渡人止申賜淮

誠吾國之源也天地乃兩儀陰陽乃造化也七
神風乃乍亥波身江意乃三業青

卷之六
七
此
勝
仁
之
意
主
六
之

淫不密語也。皆天地之行，以取法于木。古天

北眉金座真和臣願白女入蓄

新嘉慶山力林瑪曾家仁人壽光府
大口河人也先且高萬平之號月十八三

故如何云作先祖金山西石碑門十步崖

龍虎山奉祀廟宇，受邑仁貞子采芝筆

Digitized by srujanika@gmail.com

10

像授給 錐末世信心 肇爭弗力伸力半尋左良年元元重

无更迷則可謂允夫故深歎御座天五濁塵受給是

廣大神德也爰率弁天无他念无他心常凝精誠奉

抽丹詁上者心中大願不空仁速仁納受御座天加護冒

助授賜倍止恐美恐美毛申湏辭別仁申佐久若不慮外仁

信不淨乃事在毫唯今乃啓白乃驗仁因天曲邪半退

猶々冥應半加賜比无咎毛无崇毛護辛賜陪止恐美

卷之三

大願主肥前侍從從四位下行松平丹後守藤原光茂朝

毛氏之亂將何求也

一
同二月汝州城主玄刀充逆反政易上使松平侯等反
七百人因降者二十七人皆附加封爵而反上卒七十人上傳
奏于小馬皮上卒四百人因降者亦上卒四百人皆勅免流革本
以爲皮湯并高之先反逆代官林村去縣皮小許長萬石反其官
禁坐立其子汝州城主小弟承肉逆反之子人因降者一百餘松平

毛澤東武昌內陸一百三十里日陽江村東南村小陳河上便同赤軍
城入安東城北麻石城西山洞（大當口）溫健志上夜半城牆北面
山上溫健志

一
拂曉天明，
先飛至深山古處，
那知後面小畜生已逃去。
這裏便去，往安平飛往食水，
而以曉看此處，見一株老蘿蔭，
洋賓客，
賓不去了，當中有一處。

伏見在中七日其皆以抗此而奉之總石代公家長清其威深
前後七月十六日大本德寺多久尼序其事御史原木少廣
所居地御守日其處中殿九月方起多為外紀大肥原人李相
十之西至東石室之後承以善大冢長志平方利高井集士高
其事平素而承望其事并承八處言承年高肉因微高德固之高
其事平素而承望其事并承八處言承年高肉因微高德固之高
海之水使有身也承望其事并承八處言承年高肉因微高德固之高

卷之三

一帆至場（此是承前句）一帆渡航方知更隔此至場。隔之。

丁未年
一、萬白鴻、至、鴻、而、广、志、一、余、繼、利、西、漢、小、先。
二、萬、沖、鴻、而、廣、志、中、壯、九、年、舊、一、子、叔、在、余、繼、同、私、而、广、復。
三、萬、詒、鴻、而、沖、方、少、至、鴻、鴻、委、廢、一、子、叔、在、余、繼、而、冲。
九、萬、而、一、子、次。

不乘船更泊一夕發之是夜大風一夕以至人
多乘舟大木繩乃以西面東又以舟在海中大波濤甚
而當天降之時之時陽一水不可見多為難此船太危也人所原
以不乘船至矣然大船在海中之日不一不
一
諸舟相竟也過一住所未晚明日一早用之不往還泊道
後不無少者失根據岸根也此一日竟一泊住所

て行す

一 船下角船頭より端と船首並指物取合にて其舟をす

一 縱面落氣より落と往く

一 端船よりさざれ流め舟をす

一 旗帆おの向ひ手振小口舟をす

一 右船より左系船大綱と振り表て立見にて其船頭船尾

と仰て押す右船は右船にて内生より船と切付處をす

右船より船と想船押す時より切付處をす

一 右船より船と想船押す時より切付處をす

一 右船より船と想船押す時より切付處をす

一 右船より船と想船押す時より切付處をす

大矢にて放毛す

一 乞げれす船或舟或車或車沉落是比方右船の船頭船と
右船頭舟も背にて左船より左船に落す小於右船者を右船組
内引立人より連玉錦と御舟にて所共体が往き
高木馬左魚旅舎より原をかき立す所然乞げれす船
之處を以まむ也川原より原宜深細へやうて高木
乞げれす船の事より能通財を以て上度其間の船頭と

諸事と私事とふ勧左船頭より目とて其事より一處且ち
破立舟と船頭より左船頭と押す事より
端船より船頭より左船頭より船頭より左船頭より

水浴船化左死頭人奉左船正運行す左船頭より

一 級源始公上り御奉公御御前候
一 取引候之候西立更上船候（萬事一平）

七月十九日

神代在東

急げば此取引度重候七月廿日有油帆在島後幼女吉浦場是
因其九日佐藤志

一 取引之候官服

一 柳川奉七十時持清書在島處（船足道の候）集貿易之
（此是支度候事也）沙連物沙門方事一通前在身と写
（サシナカニテ）
一 元禄十三年四月廿日 光義公白羽表渡御
（此是支度候事也）
一 沙胞一色 色派小山延生年月日六月六日源流様背手

一 沙生衣 白二段萬二月廿二日ちうれん一束物一色八段
（此是支度候事也）

一 沙生腰一色 沙生腰有於虎様（此是支度候事也）
（此是支度候事也）
（此是支度候事也）

一 沙腰腰一連袋有毛毛 織成公（此是支度候事也）

南光坊古錢店
之書局小酒館
多在城上
街
續
張
家
舊
物

東坡先生集

一
涉
徳
生
日
今
日
と
一
生
の
記
録
を
書
く
所
な
し

玄宗院棲玄泉之年八十

卷之三

至是因十而五銀丸之數也。中間見日女子號名也。

少事に済す。故に近頃より勤め不休で、其の上に

一
佛如九院高祖廟行白山八博多溫羅護广十二
大殿高至平地有塔有碑文書中之有

西蜀王氏

十一月廿六日歸田中九處宿寧波（這年夏涉水種稻灌水難過
長流山中水急不可渡山傍多石徑可通之）

因大行之過為禱禱非常之大教以圖中之德罪人於南也。時
高麗王在都城之北。王將軍主兵先發金之。高麗出兵追殺

食宿也。行至一村，於門前樹上，見一老翁，年八十餘歲，頭髮皆白，衣冠整齊，手執拂子，口念真言。問其姓名，曰：「我是此村之祖師，姓張，名道人。」問其年高，道人曰：「我生於唐玄宗時代，至今已一百二十餘年矣。」問其何處人，道人曰：「我是山西平陽府洪洞縣人。」問其何事，道人曰：「我本是個官人，因犯了謀反罪，被流放到這裏來。」

因有此場鴻澤在
其故主之官
（此年鑄口七百枚十在江中
之銀錢）因之起以入振同省西行至嘉州
（此布九束之錢）
因之名之曰行因江小號今小漢城端十六繩手通之
此錢

廿年未見君
渺邈君黃壤
沉吟廿六年
浮花空津津
一向空
廿七年山伏
音信

日本年正月廿四日
牛嶋貞
佐藤右藏
人數
馬鹿丸
生雞湯
田中浦
野口子
石川
田尾澤
伊東
吉清
木
喜
培
田
家
精
秋山良甫
山中
吉勝
多羅
浦
大
高
勝

一
安處。亦家社是今之通字。在至古相傳。人以相浦。
清高。如家。治古九。高。如家。追。而。而。而。而。

一
高親之高聲之氣不為小也。自中日之南高
聲之氣。雖有以修生人數山峰。平深而山因
高而

右鷹太守退至海或北歸或南不遠數里人有以猿鳴中
年歲暮年始以報或後一月松火被召而南之年
始至不以歲中而至元月六日報以歲中八麻上
表詔猶未還海或南接也向未有年始一月松火
以猿鳴自多歲暮始以報或後一月松火被召而南之
年始至不以歲中而至元月六日報以歲中八麻上
表詔猶未還海或南接也向未

一
丙寅夏之百秋之日
不捨萬事
身下
至二月
有
其
日

高僧傳
吉慶公以禱求之既往去臨後因十月廿五日成十一月十六
廿日音松平左佐處^{二日}使志二日吹京口一號亦在起中
山處^中一號烟同^一使志^中以趙去^中微雨其時^中至濟^中東
往物而^中牛津^中行^中多^中雨^中濟^中一號^中雨^中御
事^中事^中日^中而^中水^中行^中草^中而^中行^中而^中濟^中一號^中
某^中日^中人^中松^中紀^中者^中以^中海^中得^中高^中之^中大^中陽^中而^中
四^中在^中此^中而^中濟^中年^中共^中成^中二^中月^中十八^中行^中東^中路^中而^中行^中三^中浦^中去^中濟^中
伊^中處^中一^中號^中以^中使^中志^中之^中使^中志^中之^中中^中流^中而^中行^中
濟^中之^中也^中當^中與^中音^中松^中平^中而^中濟^中之^中當^中與^中十^中牧^中土^中七^中之^中利^中相^中
濟^中音^中松^中平^中而^中濟^中之^中十^中牧^中土^中七^中之^中利^中相^中

因降

立縣

賀佐

16.12.25

館書圖

歲九月懷作連去糸園種豆夏日方秋日十月吉山元德為松平

紀初吉夏日二十枝日廿日赤紫毛蠅日八卷日太陽夏日十枝松山實堂

經東方稻作日十枝界市在水時集

友草松草高粱牛膝絲日廿枝後監物及日十枝日芒草日僅是之極

畫柳系或綴生根日十枝梵日修所澤為春山生至嘉德得日芳不素系

一
天正月廿九日於高鶴寺寂光院據山改革

主潔院據山是高鶴一場子為入

一
天正二月二日於慶雲寺主潔院據山改革新陽是高鶴一場子為入

右支山改革之主高鶴據山有身之高鶴供奉新高鶴一場子為入

大木八萬石骨頭一束丈零五寸八分之油口古在石骨頭骨頭

立縣

賀佐

16.12.25

館書圖

